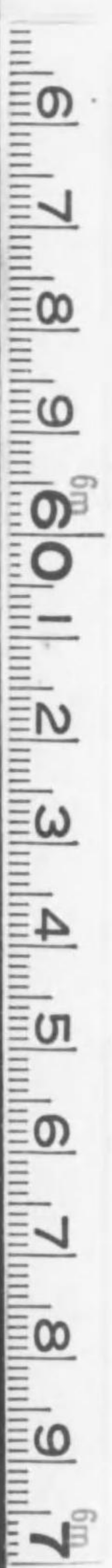


特257
831

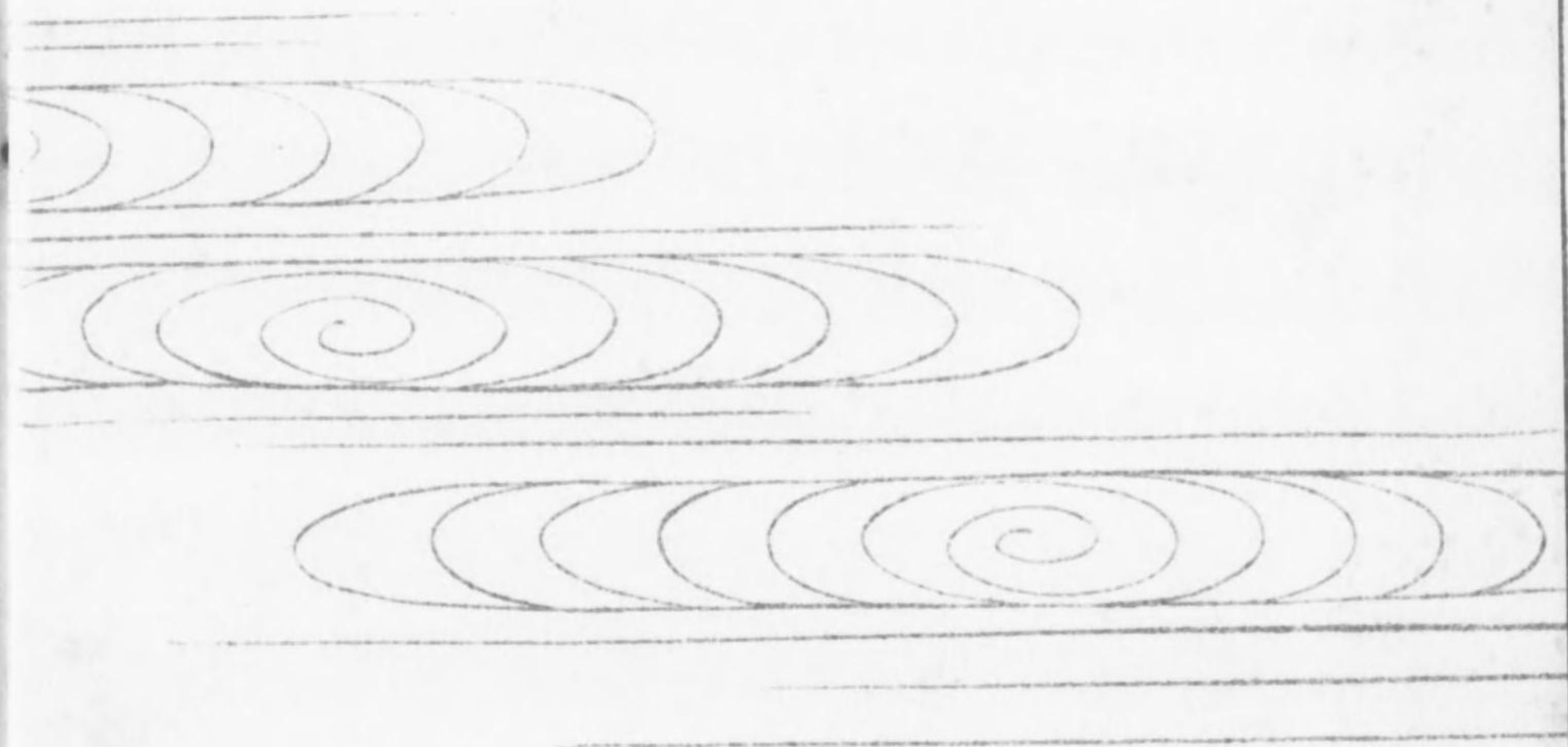
466
吳 八 鸚 葛 當
服 島 小 城 麻
内十一



始



特 257
831



吳服

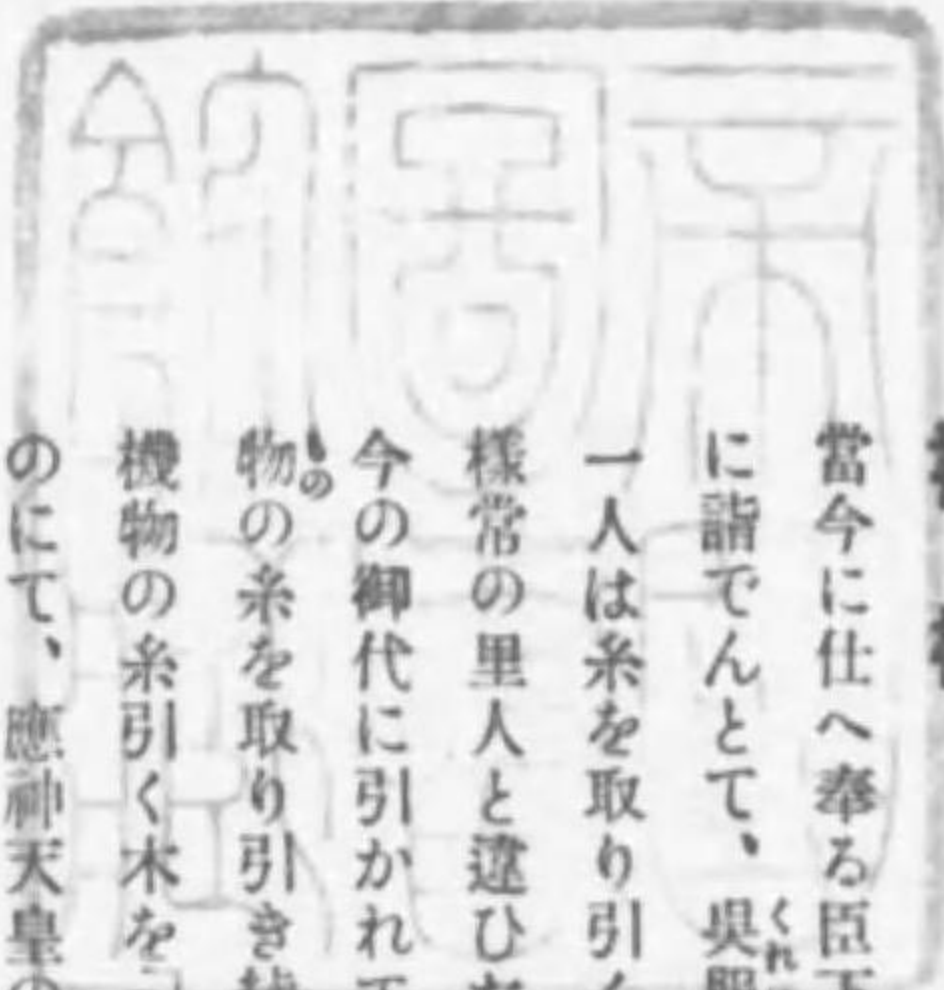
世阿彌元清作

曲柄 初能 一番目 神祇物
季節 九 月
稽古 三 級
所 攝津國豊能郡池田吳服神社

梗概

當今に仕へ奉る臣下(ワキ)攝津國住吉より浦傳ひにて西の宮に詣でんとて、吳服の里に到れば、松原に一人は機を織り、一人は糸を取り引く二人の女性(前シテ、前ツレ)あり。その様常の里人と違ひたるを怪しめば、昔の吳織、漢織めでたき今の御代に引かれて現れ來れるなりと答へ、もと漢織とは機物の糸を取り引き綾の紋をなす故に呼ばれたる名、吳織とは機物の糸引く木を「くれは」といへば、かく名づけられたるものにて、應神天皇の御宇、吳國の勅使に伴はれて日本に渡り、この吳服の里にて錦の御衣を織り奉りて、殊の外寂感を蒙りたり。今も錦を織りてわが君の御調に供へ奉らん。夜長なりとも曉の空を待ち給へ、姿をかへて來らんとひて消え失せたり。(中入)

官人悦びてこの松蔭に一夜を過せば、夢のうちながら、吳織(後シテ)漢織(後ツレ)現れ出でて、きりはたりちやうちやうと、踏木の音も高らかに錦を機りて、舞を奏し、織り上げて御調に捧ぐ。



謡ひ方

初能の中にも重きものに非ず、總じてさらりと居着かぬ様に謡ふべし。

△シテ 女性なれども優しき内に確かりと、眞の一聲の出は調子を抑へて閑かに謡ひ出し、ワキとの掛合は閑かにしつりと、弱吟と強吟と變化する所多ければ態とならぬ様に謡ひ出し、サシはさらりめに、ロンギはツレと連吟にて閑かに謡ひ出し、△後シテ 女神なれども強吟にて確かりと晴れやかに謡ひ出し、地との掛合もたつぷりと謡ふ。

△ツレ シテとの連吟にはシテの位に従ひ、一人の時はさらりと調子を高く謡ふ、シテとの連吟多ければ注意すべし。

△ワキ 朗かに確かりと勢よく謡ひ出し、シテとの掛合はさらりめに、待謡は確かりと謡ふ、素謡の時は一人にて謡ふ。

△地 初回は朗かにさらりと出で、クリは大きく、サシはさらりと附け、クセは閑かに出で段々と運びを付け、ロンギは氣を替へ滞りなく、中入後のシテとの掛合は大きく確かりと、「悪魔を恐るゝ」よりさらりと、切は乗つて早くならぬ様に謡



呉服

ひ納むべし。

語釋

くれは―應神天皇の御代に使を吳國に遣はして、織縫の工女を求め給ひしに、吳王は體て兄媛、弟媛、吳織、穴織の四人を奉りぬ。吳織は即ちクレハトリ、穴織はアヤハトリなり。此二女現れて昔を語り、今を祝することを作曲し、吳服と題したるなり。

西の宮―兵庫縣攝津國武庫郡西宮神社をさす。

あさか湯―住吉の南東にある地名。

吳服の里―攝津國豊能郡池田町を舊名吳服の里と云へり。

町に吳服神社、穴織神社あり。此縁起にてこの作ありしなるべし。

唐きぬ―女の装束に唐きぬと云ふものあれど、こゝは唯唐風の衣と解すべきなり。

しきしまの道―歌道のこと。唐衣のみならず言葉の花まで織出だす由に云へるなり。

是は應神天皇の御宇に云々―淮南子に、「黃帝臣伯餘初作衣矣」とあり。原始に、「黃帝妃西陵氏始教民養蠶以織帛矣」とあり。日本にては應神天皇の御宇始めて絹を織事上に紀すといふ。

くれはとりあやはとりと申し、二人の者―こゝには二人と

作るも、日本紀には應神天皇の御代四人來朝すと記せり。

またあやはとりとは云々―袖中抄に、「くれはとりとは綾の名なり。くれはとりあやをりの名をあやにつけたるなり。あやはとりは、絲を取引の心なり」とあり。日本紀に穴織とあり。又漢織と書いてあやはとりと和したり。

くれはとりあやに戀しくありしかば云々―後撰集第十一卷戀歌三に載す、藤原諸實の歌、「くれはとりあやに戀しくありしかば二村山も越えずなりにき」とあり。「おほやけの御使にて東へまかりける程に初めてあひしれる女にいひ契りて出たちにけり。後に改め定められて召かへされて、京へまふできにけるを、此女悦びながら間につかはしたりければ、道にて人の心さして侍りける。くれはとりといふ綾をふたむらつつみてつかはすとてよめる」との詞書あり。

くれはとり怪しめ給ふ―玉葉集第十一卷、戀歌三に載す、前大納言藤原隆房の歌、「つくふくと見るに心は吳はとり怪しと人の目にや立つらん」とあり。

それ綾と云つば唐土吳郡の云々―倭名抄に、「綾似綺而細者也矣、説文曰綾東齊謂之布帛之細者、曰綾矣、或云有熟練綾長連綾二正綾花文綾平綾等之數品、今唯稱綾者似紗綾而地文皆二重菱也」―吳國には、珠玉織文象犀翡翠、鸚鵡、孔雀、華果の類多し。風俗豊にして山川江湖の風景を慕ひて

遊宴歌舞を好む。吳の服は華にして甚美なり。四方是にあらざればうるはしといはず。云々とあるによる。

奏覽―奏聞して天覽に供するをいふ。

それより名づけつゝ―御服を山鳩色とも、雲鳥の綾とも名づくるは此時に起れりとの意。

宸龍の御衣―陛下の禮服をいふ。

山鳩色―御服は山鳩色に染むるなり。黄の上に青をかけて山鳩の毛色に似たればいふ。之を黄檜染とも麴塵の御袍とも申すなり。

羽ぶさをたむむ―羽ぶさは翼のこと。たむむは其翼をたむみたる形を織るの意をいふ。

吳服の文字をやはらけて―やはらくとは、漢音を日本語に呼びかふるをいふ。

錦の色は小車の―の色は錦といふ程の意に、色の字を軽く見るべし。錦の小車とは、小車の形を打ち違へて丸く織りたるをいふ。伊勢大神宮に奉る御服には此紋を用ふとあり。車は牛に奉かするものなれば、丑三つにつけていふなり。

丑三つ―丑の刻は今の午前二時より四時まで。昔は一刻を四つに割りて、丑一つ、丑二つ、丑三つ等いひたるなり。即ち丑三つは午前三時、常に夜半のものすこき意に用ふ。君が代は云々―拾遺集に載す、讀人不知の歌に、「君が代

は天の羽衣まれにきて撫つとも盡きぬ巖なるらん」とあり。松の葉の散り失せずして云々―古今集の序詞なり。朗詠集、公乘億長安十五夜賦に、「織錦機中已辨相思之字、搗衣砧上俄添怨別之聲」とあり。此文前句は、晋の寶酒といふ人、遠國に行きて歸らざりしに、其妻かぎりなき情を詩に作り、手織りの錦と共に送りしといふ古事、戀心を述べたる詩なれば、相思の字とは云へり。後句は、漢の蘇武とらはれて胡國にありしに、其妻は秋來る毎に衣を搗ちて、夫歸らば着せんと待ち兼ねたる古事、物思ひして衣を搗てば、砧の音まで別離を悲しむ聲を添ふるとなり。共に錦と衣に縁ある古事なれば、こゝには引用せり。悲しみの意までに拘はるべからず。きりはたりちやう―機織る音、俗にトン／＼カラ／＼などといふ。

織姫―機織女を云ふ。おりひめと云ふに就きて、七夕の織女を思ひ出でたるの意。

夢の精靈妙幢菩薩―妙幢は菩薩の名。此菩薩を念じて眠れば、必ず戀しき人の夢に見ゆる事、古今榮雅抄に見ゆ。されば夢の精靈といふなるべし。妙幢菩薩とは、金光明最勝王經第五蓮華喻品に、「爾時佛告菩薩樹神善女天女汝今應知妙幢夜夢見妙金鼓出大音聲讚佛功德并懺悔法」とあり。影向なりたる―形を現はすこと。

御代のためしの一御調を絶やさぬ例になるべきをいふ。
問狂言

所の者出て、ワキと問答し、吳織、漢織の謂れを語り退く。
(ワキ) この所の者如何様なる御事にて候ぞ (ウツク) 心得申し候。この吳服の里の者をお尋ねは如何様なる御用にて御座候ぞ(此間せりふ常の通り)まづ人皇十六代應神天皇の御宇に。わが朝の事は申すに及ばず。新羅百濟高麗までも。残らず日本に靡き随ふ御代なれば。唐土よりも數の寶を船に積み。綾女糸女と申す二人の織女の女婦を添へ。大船を明洲の津より押し出だし。順風に任せ程なく日本の地に着くを。初めは和泉國吹飯の沖に浮かめしが。是より都へは程遠く候とて。其後難波の浦まで船を寄せ。則ちこの松原に機を立て。色々様様の御衣を數多織り終に御調を捧げ申されければ。主上御感淺からざりし時分。織女はなほも珍しき紋もがな。吳服に織りつけたしと思はるゝ處へ。五色の山鳩一羽飛び來るを。佛神の敷へぞと思ひ。やがて織りつけ。今に山鳩色の御衣と申して。殿中の上衣なる由語り傳へ候。しかるに吳織漢織と申す子細は。機の中に糸引く木をくれはといへば。事を營む時來れば取る手に譬へて。一人を吳織とは名付け給ふ。又今一人を漢織と申す事は。吳服織る時機の上にて糸取り引き。綾の紋を心のまゝに出だすにより。則ちこれを漢織とは申し



習はず。その後こゝかしこへ帝都を遷されても。今に於て都の町の内に。綾の小路錦の小路と申して御座候もこの子細にてある由承る。總じてわが日本にて綾織る事はかの織女が元來なる故に。後には二人共に神に齋ひ。吳服の明神綾服の明神と申して。隠れなき靈神にて在す。これにつき數多子細のあるとはいへど。まづわれ等の存じたるはかくの如くにて候。(ウツク) 言語道斷奇特なる事御説なさるゝものかな。めでたき御代にはこの松原に於て。機の音の聞ゆると申すが。いよいよ國土豊かためてたからうする御瑞相に。當社明神假に人間と見え給ひ。古の機織り給ふ氣色を學ぶで。御目につけ給ひたると存する間。神前に於て信心私なく御祈念なされ。その後奏聞あれかしと存する。

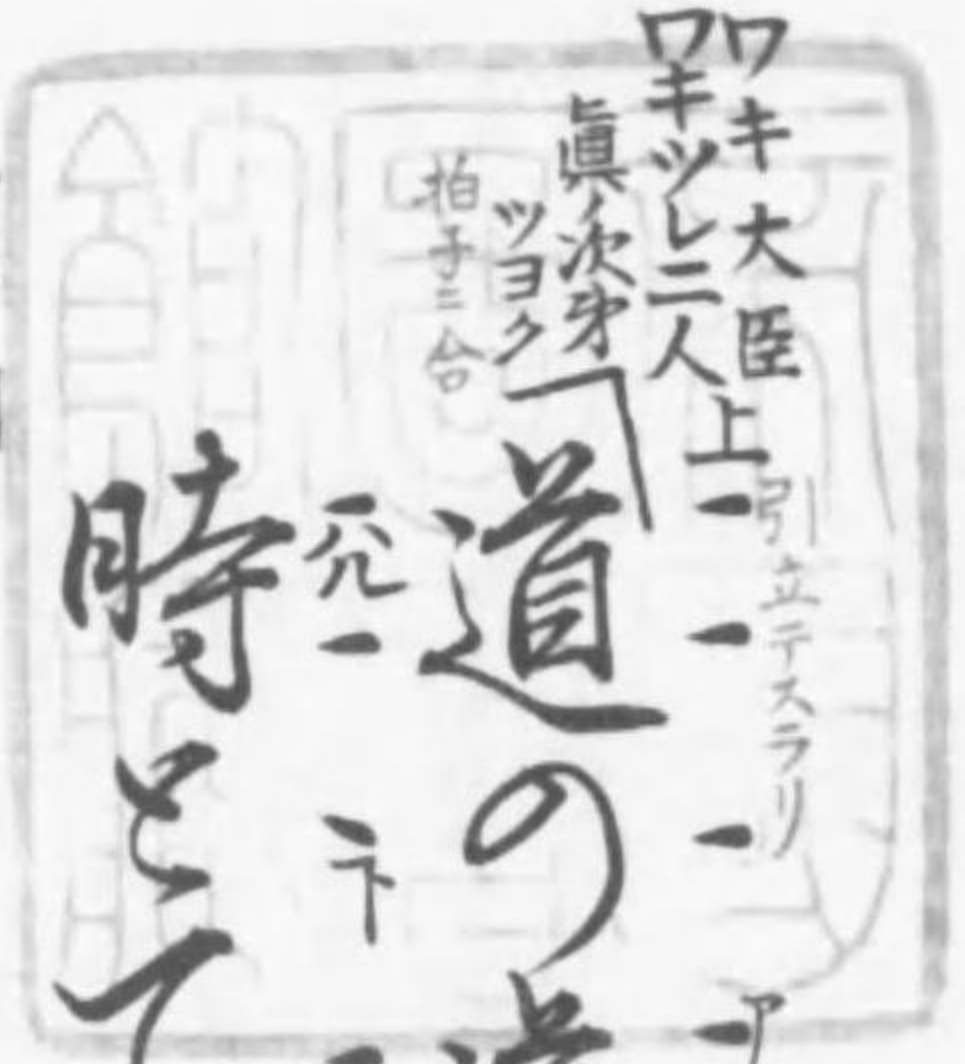
装束附(吳服)

| | | | | |
|--------------------------------|----------------------------------|------------------------------|------------------------------|--|
| ワ | ワ | ツ | ワ | 後 |
| キ | キ | レ | キ | シ |
| 大 | 大 | 綾 | ツ | テ |
| 臣 | 臣 | 織 | 織 | 吳 |
| | | 服 | 服 | 服 |
| | | ノ | ノ | ノ |
| | | 女 | 女 | 神 |
| 大臣烏帽子 赤上頭掛 着附厚板 白大口 袴狩衣 繡紋腰帶 扇 | 大臣烏帽子 萌黄上頭掛 着附厚板 白大口 赤袴狩衣 繡紋腰帶 扇 | 面、連面 鬘 鬘帶 襟赤 着附摺箔 唐織着流又ハ側次 扇 | 面、増 鬘 鬘帶 襟白赤 着附摺箔 唐織着流又ハ側次 扇 | 面、増 黒垂 天冠 襟白赤 着附摺箔 緋大口 唐織坪折又ハ 舞衣又ハ長絹 縫腰帶 扇 |

吳服

素織座席順

ワシツ
キテレ



道の時とてや。道の道たる
時とてや。國々豊かなるらん

ワキ詞 寛カニ

「そもそもこれは當今に仕へ奉る

臣下なり。われとの間は攝州住吉

に参詣申してふ。又これより浦傳ひ

し。西の宮に参らばやと存じゆ



天道行上

住の江やのどけき波の浅香瀉の
 どけき波の浅香瀉玉藻刈る
 なる海士人の道も直なる難波瀉
 行方の浦も名を得たる呉服の里に
 着きにけり呉服の里に着きにけり
 くれはどり綾の衣の浦里に年経
 て住むや海士少女 立ち寄る波も

シテ女二人上
 ツレ女二人上
 眞ノヤイ
 拍子合ハス

シテサシ上



われこの國にあらざり

白糸の機織り添ふる音しげ
 これは津の國呉服の里に住みて
 久しき二人の者 われこの國にあり
 ながら身は唐土の名に負ふ女工
 の昔を思ひ出づる月の入るこや西の
 海波路遙かに來し方の身は唐人
 の年を経てぞに呉服の里までも



身ミにシ知チらレたル。名ナ所トコロかナ。これコノも
 かカしキきキ代ヤのタめメ送オウりノ迎ムカへシ
 機ハタ物モノのカ。大オホ和ニッポンにもモ織オリるカ唐カラ衣キヌのカ營イ
 みミをセ織オリるカ唐カラ衣キヌのカ營イ又マタをセ今イマ敷シ島シマの
 道ミチかカけケてテ言コトのハ葉ハ草クサのハ花ハナまマでデもモあ
 らラはハしシ衣キヌのカ色イロ添ソへテ心ココロをク碎クくク紫ムラサキ
 のカ袖スリーブもモ妙タマシなるカ。かカごゴかなナ袖スリーブもモ妙タマシ

○小菫

松原に來て見ればやごとなき女



なるナかカごゴかなナ。かカごゴもモわワれレこコの
 松マツ原ハラにキ來キてテ見ミれレばバやヤごゴとトなナまマきキ女メ
 性シヨウ二ニ人ニあアりリ。一ヒト人ニはハ機ハタをオリ。今イマ一ヒト人ニ
 はハ糸イトをオリ引ヒきキ。互互ニにニ常ツネのサト里ト人トと



はハ見ミえエ給キはハずズ。そソもモ方カタ々々はハ如イ何カなるナ
 人ヒトぞゾ。恥ハかカやヤ里サト離ハナれレなナるル松マツ蔭カゲのノ
 潮シホもモ曇クモるル夕ユフ月ツキのノ影カゲにニまマぎギらレて

浦波の聲にたぐへて機物の音聞
 えぞと思ひしに知られけるかや
 かや 何をか色み給ふらんその
 身は常の里人ならでこの松蔭に
 隠れゐて機織り給ふは不審なり。
 いかさま名乗り給ふべし 己れは
 應神天皇の御宇にめでたき御衣

を織りそめし。吳織漢織と申しし
 二人の者。今又めでたき御代なれば。
 現にあらはれ来りたり 不思議
 の事を聞くものかな。それは昔の
 君が代に唐國よりも渡されし。
 綾織二人の一人なるが。今現在に現れ
 給ふは。何といひたる事やらん

ミテ詞 南カミスラリ

早くも心得給ふものかなまづこの
 里を吳服の里と名づけ初めしも
 何故ぞわれこの所に在りし故
 なり 又漢織とは機物の糸を
 取り引く工ゆゑ綾の紋をもなす故
 に漢織とは申すなり 吳織とは
 機物の糸引く木をばくれはといは

○小謡

くれは取手によそへつゝ 吳織とは
 申すなり くれは二人の名に寄せて
 吳織 綾とは申し傳へたり
 然れば我等は唐人なれば大和言葉
 は知らねども くれはとりあやに恋
 しくありしかば二村山と詠みし歌
 も二人を思ふ心なり 吳織怪しめ

吳服

五



給ふ旅人の御。怪しめ給ふ旅人の御。目之程はさすがに名に負ふ。都人の所から唐人と我等を眺見せらるはげにかしこしやよき君に仕ふる人かありがたや仕ふる人かありがたや。蕪をこれ綾といふは唐土吳郡の地より織りそめて女工の長き營

○サ由獨吟
○切迄雜子



みなり。然るに神功皇后三韓を從へ給ひより和國異朝の道廣く。人の國まで靡く世のわが日の本はのどかなる。時代の光は普く國富み民豊かなり。東南雲收まりて西北に風靜かなり。應神天皇の御宇かよ。吳國の勅使この國に始めて

来り給ひに綾女系女の女婦を添へ
 万里の滄波を凌ぎ来て西日影残り
 なく。吳服の里に休らひ連日に立つる
 機物の錦をなりとり綾の御衣を
 奉る。勅使奏覽ありしかば。睿感殊
 に甚し。それより名づけつ。衣龍の
 御衣の紋營みも名高き山鳩色を

うつしつ。氣色だつなり雲鳥の
 羽ぶさをたむ綾となすいもかし
 こかりけり。然れば萬代に絶えせ
 ぬ。御調なるべしと。御定めありしより
 吳服の文字を和らげて。吳織漢織
 と。名づけさせ給へば。年を迎へて色を
 なす。綾の錦の唐衣返す返すも

君が袖（袖）がきたためしを引く糸のかる
 侍代（侍代）ぞめでたき（めでたき）これにつけても
 この君の（君）これにつけてもこの君の
 めでたきたためし有明の夜（有明の夜）すから
 機を織り給へ（機を織り給へ）いざいざさらば機物の
 錦を織りてわが君の侍調（錦を織りてわが君の侍調）に供申さん
 げにや侍調（げにや侍調）の數々に錦の色は

地上

小人（小人）同中（同中）元一ト
 小車の（小車）丑三つの時過ぎ曉（時過ぎ曉）の空
 を待ち給へ（を待ち給へ）姿をかへて来らんさら
 ばといひて吳織漢織は帰れども（ばといひて吳織漢織は帰れども）
 鶏は（鶏）はまだ鳴かずや夜長（はまだ鳴かずや夜長）なりと待ち
 給へ（給へ）夜長くとも待ち給へ（夜長くとも待ち給へ）中入間
 嬉（嬉）しきかなやいざさらば嬉（嬉）しきかな
 やいざさらばこの松蔭（やいざさらばこの松蔭）に旅居（に旅居）して



四上歌
待詠
○雑子mmw



君代は天の羽衣

風も嘯く寅の時神の告をも待ら
 て見ん神の告をも待ちて見ん
 君が代は天の羽衣稀にきて撫つ
 とも盡きぬ巖ならなん千代に八千
 代を松の葉の散り失せずして色
 はなほ真折のかづら長き代のたぬし
 に引くや綾の紋曇らざりける時



君代



君代は天の羽衣

とかやこの君の畏き世ぞと夕波に
 聲立て添ふる機^ハの音^ハ錦を織る
 機物の内に相思の字をあらはし
 衣擣つ砧の上に怨別の聲松の風
 又は磯打つ波の音^ハきりひま
 なき機物の^ハ取るや吳服の手繰
 の糸^ハわが取るはあやは踏木の



舞服

〇〇
仕舞
吟

同上

足音 足音はたりあやうきまきはた
 り。あやうきあやうき悪魔も恐る声
 なれやげに織姫のかざりの袖
 思ひ出でたり織女の思ひ出でたり
 織女のたままたま逢へる旅人の夢の
 精霊妙幢菩薩も影向なりたる
 夜もすがら夜もすがら寶の綾を織



わんざ
舞服

り立て織り立てわが君に捧げ物侍
 代のためしの二人の織姫。呉服あやは
 のとりどりに。くれはあやはのとり
 どりの侍調物供ふる侍代こそめで
 たけれ。

呉服

十冬

八島

八島

八島

世阿彌元清作

| | | |
|----|------------|-----|
| 曲 | 二番目 | 修羅物 |
| 柄 | 三月 | |
| 季節 | 三月 | |
| 古 | 三 | |
| 種 | 歌 | |
| 所 | 讃岐國木田郡屋島壇浦 | |

梗概

都方の僧(ワキ)西國行脚の途次、讃岐國八島の浦に到り、とある鹽屋に立ち寄りて一夜の宿を求むれば、主の漁翁(前シテ)年若き男(前ツレ)と共に釣より歸り來り、見苦しき宿を愧ぢつゝも内に請じ入る。僧、この所に於ける源平の軍語を所望すれば、漁翁即ち元暦元年三月十八日の戦に、悪七兵衛景清と三保の谷とが互に引き合ひて終に兜の鏝を引きちぎりたる事、佐藤繼信が能登守の矢先にかゝれば、平家の菊王も船にて討たれたる事などを語る。僧その餘りに委しき物語に驚き、漁翁の名を問へば、義經なる由を仄かして立ち去りたり。(中入)

その夜、僧の夢に義經の幽霊(後シテ)甲冑を帯して現れ出で、波に流れしわが弓を敵に取られて恥を後代に傳へんことを恐れ、身を捨てて拾ひ取りたる次第を語り、今修羅道に墮ちて、昔の如く能登守と戦ふ様を示ししが、夜も明け行けば、ありつる姿は消えて、たゞ鷗の聲浦風の音のみ現に残れり。

謡ひ方

田村・兼と共に三勝修羅として、殊に本曲は最も上品に氣高きものなれば勇壯なる曲なり。されど前半は寂しき處もあれば、しめやかに、晴れやかなるを厭ふ。後半は品よく勇壯に謡ふべし。

△シテ 一聲の出は調子を高めす伸んびりと謡ひ出し、「一葉萬里の」より氣を替へ緩めて朗かに、以下下歌上歌伸んびりと、ツレとの掛合はかゝつて出で、閑かに落着を付け、初同後の語りは確かりと強味を持ち、次のツレとの掛合は語りの心なれば底力を入れ確かりと段々と運びを付け、ロンギは調子高くなるぬ様に締めて謡ふべし。

△後シテ 位が重くならぬ様に立派に大きく謡ひ出し、ワキとの掛合は荒くならぬ様に、雄壯に段々と詰め、サシは氣を替へ朗かにさらりと出で、地との掛合ははつきりと緩みなく、切は氣を掛け確かりと、地との掛合は勢ひの抜けぬ様に謡ふべし。

△ツレ シテとの連吟はシテの位に従ひ、一人の時のシテ并

八島

にワキとの掛合はさらりと誦ふ。

△ワキ 餘り位を取らずに稍確かりと朗かに誦ひ出し、道行も長閑に、シテとの掛合はさらりと、待誦は暗れやかに誦ふ。素誦の時は一人にて誦ふ。

△地 初同は抑へて閑かに出で、「昔の筈」と閑め、弱吟にて納め、上歌は氣を替へ調子高くならぬ様に、朗かに閑かに、二の同はシテの誦の氣の抜けぬ様にすかりと受け、以下運びを附け確かりと引締め、氣の抜けぬ様に誦ひ、「松風ばかりの」より閑めて、ロンギは調子を替へ、高くならぬ様さらりめに段々と運び、「潮の落つる」は高くならぬ様に、留は閑めて誦ふ。中入後「武士の」手強くさらりと出で、クリは大きく、シテとの掛合は氣の抜けぬ様にさらりと、サシ、クセは淀みなく手強く、切は勢ひよく走らぬ様に誦ふべし。

能の異式 (小書)

弓流 — 後の裝束が變り、「くつばみを浸して攻め戦ふ」の後にイロエありて扇を落す形あり、又床几を小鼓方と替へ跡は位も閑まり形も替る。

素働 — 重き習にして、弓流の中にて弓を拾ひに行き流れ足の形あり、切は残る留となり、大小の流しにてシテは幕に入り、ワキが留むるなり。

脇留 — シテが留めずに幕に入りワキが留める。

原清正の歌、「殿上はなれて侍りてよみ侍りける」と詞書して

「天つ風ふけひの浦にゐるたづのなどか雲井にかへらざるべき」とあり。歌意は、紀の守になりて地下に居るけれど、又昇殿を聽さるゝ身にならざるべき。即ち昇殿を聽さるゝ身にならぬ事はあらじといふ意。

紫すそこの御着背 — 下の板を紺に染め、其他を紫糸にて作れる鎧。腹巻丸丸などの製に對して、なみの鎧の事を着背と呼ぶなり。

鞍笠 — 鞍壺のこと。鞍の尻を載する處。

一院 — 後白河上皇の御事。

檢非違使 — 犯人追捕の官人。即ち現今の警視總監の如き役人。

五位の尉 — 從五位下にて左衛門少尉なれば、かくいふ。

言葉駈ひ — 互に口にて敵を罵り合ふこと。

判官 — 源義經をいふ。官檢非違使判官なればなり。

能登殿 — 能登守平教經のこと。

菊王 — 教經に從ふ童の名。

朝倉や木の丸殿にあらばこそ云々 — 天智天皇、筑前朝倉山に丸木の行宮を造りておはしゝを木の丸殿といふ。そこに御製に、「朝倉や木の丸殿に我居れば名のりをしつゝ行くは誰が子ぞ」とあるを引用す。

語釋

月も南の海原や — 南の海は南海道をさす。

八島 — 香川縣讃岐國木田郡八島。現今屋島と書く。

四國 — 伊豫、土佐、阿波、讃岐の四ヶ國。

西國 — 京都より西の方の國々をさす。

鹽屋 — 鹽を焼く家、即ち海士の家をいふ。

漁翁夜西岸云々 — 唐の柳宗元の詩句に、「漁翁夜傍西岸宿、曉汲清湘、燒楚竹」とあるを引用す。

一葉萬里の云々 — 一葉の小舟に乗りて萬里の海上を渡るの意。

照りもせず曇りもはてぬ云々 — 新古今集第一卷、春歌上に載す、大江千里の歌、「文集嘉陵春夜詩不明不暗臘々月といへることをよみ侍りける」と詞書して、「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の臘月夜にしくものぞなき」とあり。歌意は、明らかに照りもせず又曇りもせずして、朗かなる春の月夜に及ぶものはない、實に良き景色なりと、春の臘月夜の趣を詠じたるなり。

八島に立てる高松の — 松の木の立つといふを高松の地名にひかく。高松は屋島の西方なり。

群れある — 地名にひかく。牟禮は屋島の附近の地なり。

などか雲井に云々 — 新古今集第十八卷、雜歌下に載す、藤

落花枝にかへらず云々 — 傳燈錄に、「落花難上枝、破鏡不重照」の語あるを用ふ。

業因 — 罪を犯したる原因のこと。佛教にては、梵語、羯摩(カルマ)と譯す。即ち吾人の身、口、意の三に作す所の行爲に名づく。これに善惡の二因あり。身業に於て、殺生、偷盜、邪淫の如きは惡業にして、不殺、不盜、不淫は善業なり。口業に於て、妄語、綺語、惡口、兩舌の如きは惡業にして、不妄語、不綺語、不惡口、不兩舌は善業なり。意業に於て、貪欲、瞋恚、邪見の如きは惡業にして、不貪欲、不瞋恚、不邪見の如きは善業なり。是等三業上の一切の業は、未來善惡の果を感すべき因種なれば、これを業因といふ。成實論に、「一切生法皆屬業因」と説示するこれなり。こゝにては惡業に解すべきなり。

生死の海 — 生、老、病、死の四相、迷へる衆生の受くる苦の果報なり。即ち生死の苦し深きを海の深きに譬ふ。

舟を組み — 平家の軍勢をさす。

駒を並べて — 源氏の軍勢をいふ。

兼房 — 増尾十郎權頭兼房。源義經の郎等。渡邊にて最時が申しも云々 — 源平盛衰記、梶原逆櫓の事に、「源氏は西國へ發向す、日頃渡邊神崎兩所にて船捕へしけるが、今日既に纜を解て、三河守範賴は神崎を出で、山

陽道より長門國へ赴き、大夫判官義経は南海道より四國へ渡るべしとて、大物が濱にあり。平家は又屋島を以て城郭とし、彦島を以て軍の陣とす。前中納言知盛卿、九國の兵を率して門司關を固めたり。大夫判官は大物浦にて大淀の江内忠俊を以て船捕して、軍の談議ありけるに、梶原平三景時申しけるは「船に逆櫓と申す物を立て候ふて軍の自在を得る様にし候はゞや」と申しけりとあるを引く。

千金をのべたる — 千枚の金をのべて作りし弓なりとも大將の身より輕しとの意。

私なし — 私心なし、公明正大なりとの意。

姓名はいまだ — 我美名を世に擧ぐることは、十分の五まで到らすとのこと。

小兵 — 身長の短きをいふ。

智者は惑はず云々 — 論語、子罕篇に、「子曰智者不惑、仁者不憂、勇者不懼」との語あるを引用す。

後記 — 歴史のこと、將來の記録をさす。

兜の星 — 兜の上に銀の紙を星の如く打ちたるをいふ。

水や空 — 新後拾遺集第四卷、秋歌上に載す、讀人不知の歌

「水や空そらや水とも見えわかす通ひてすめる秋の夜の月」とあるを引用す。

問狂言

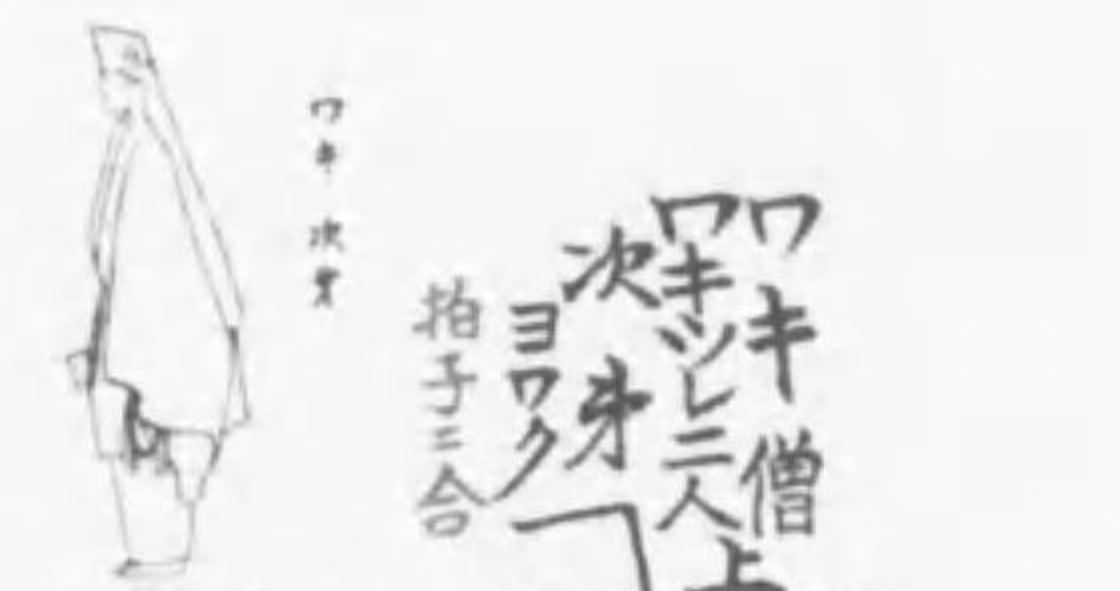
るか。但し又惡目双切れもありたるか（註）元二三寸に於て二つに折れし程に。討物取りに歸る處を。景清は三保の谷の兜の鏡をむんづと捕へ後へえいと引き留むれば。四郎は一命大事と前へ引き。互にえいやと引く勢ひにて。壇の浦は地震の如く揺めいたると申す。され共双方の力が互角なるか。鉢附の板を引きちぎつて前後へどうと倒れた處で。三保の谷はうつむきにすべつて倒れし程に。折しも頃は春なれば鼻の先が落花致す。惡七兵衛は後へ引くとてあほのけに轉んで。ほんのくほに踏貫を致されたと申す。源平の戦ひ數度にあるとは申せど。元暦元年三月十八日の此合戦が一聲花にありたると承はる。まづ我等の存じたるはかくの如くにて候が。さて唯今は何と思し召し寄りてお尋ねありたるぞ不審に存じ候（註）是は奇特なる事を仰せらるゝものかな。義経は高館にて果て給ひたるとは申せど。當浦にての合戦を一入に思し召し御心の殘し給ふにより。義経の御亡心見みえ給ひ。懇に御雜談ありたると存する間。暫く此處に御逗留あり。重ねて奇特を御覽あれかしと存する。（註）重ねては某宿に留め申さうする。（註）心得申し候。

所の者出でワキと問答し、八島の戦の様を語り退く。小書あるときは別問あり。

是は八島の浦に住む者にて候。今日は天氣よく候間。濱へ出で鹽を焼かふと存する。あら不思議や鹽屋の戸が開いたよ。見れば人の足跡もあるよ。いや是なるお僧は何とて此鹽屋へは押し入つて御座るぞ（註）主は某なるに楮は方々は安語を仰せらるゝか（註）けにと御出家の身にて偽りは仰せられまいが。それは如何様なる者が貸し申したるぞ（註）此間せりふ常の通り。去程に讚岐へ落ちし平家追討の爲に。範頼義経は渡邊福島に陣をとり數千艘の船を集め置かれし時分。判官殿と梶原は逆櫓の遺恨あつて。義経御船五艘押し出だされ。阿波の國へ御上りありお尋ねあれば。當所は勝浦といふ所と申し上ぐるを義経聞し召し。軍の門出に勝浦に着いたる事の出度さよと。その櫻間の城を攻め落し。それより讚岐の八島に押し寄せられし程に。平家の軍兵は驚き騒ぎ。われ先にと船に乗り沖へ出で給ふ。さあるによつて平家は船源氏は陸の戦ひなるに。或日の合戦に兵船一艘磯へ着き。武者一人上り大音聲にて名乗るやう。是は平家の侍惡七兵衛景清と。高らかに呼ばはる聲を聞きしより。東國の兵は我もと討つて出づる。中にも三保の谷の四郎と名乗つて眞先かけて馳せ向かひ。鎧を削り（註）割り戦ふ内に。四郎のはかせの金がさへた



| 作 物 | 装束 附 (八島) | | | | |
|--------|--|--|--------------------------------|-----------------------------|-----------------------------|
| | 後シテ 源義經 | 前シテ 尉 | ツレ 男 | ワキツレ 從者二人 | ワキ 兼僧 |
| 釣棹二 | 面、平太 黒垂 梨子打鳥帽子 白鉢巻 襟標 着附段厚板唐織 半切法被 補紋腰帶 太刀 修羅扇 | 面、朝食尉又ハ笑尉 尉髪 襟淺黄 着附無地鬘斗目 茶鞋水衣 緞子腰帶 腰蓑 尉扇 | 直面 襟萌黄 着附無地鬘斗目 縷水衣 縷紋腰帶 墨繪扇 | 角帽子 着附無地鬘斗目 水衣 緞子腰帶 扇 數珠 | 角帽子 着附無地鬘斗目 水衣 緞子腰帶 扇 數珠 |



ワキ僧 裕タリ
次才 月も南の海原や。月も南の海原
ヨウク 拍子三合
ワキ水子
八島
素謡座席順 ワシツキテ

方より出でたる僧にては。われ未だ

四國を見ずは程に。この度思ひ

立ち西國行脚と志しは。切

春霞。浮き立つ波の仲つ舟。浮き

三人道行上末

立つ波の沖つ舟入日の雲も影
 添ひてそなたの空と行く程に
 遙かなりし舟路経て八島の浦
 に着きにけり八島の浦に着きに
 けり ワキ詞 先ヲカヘスナリ 急ぎの程にこれにはや
 讃岐の國八島の浦に着きては
 日の暮れてゆへばこれなる塩屋に



ミニ漁翁上
 一声ツヨク
 柏子金太夫

立ち寄り。一夜を明かさはやと思ひゆ
 面白や月海上に浮かんで波濤
 夜火に似たり ツレ男 漁翁夜西岸に
 傍うて宿す スル 暁湘水を汲んで
 楚竹を焼くも タ 今に知られて蘆
 火の影ほの見えそむるものす
 こそよ 月の出汐の沖つ波 霞の

呼び聲
びラウケ其マニト
浮ク心ニテ引キ思シ
サゲ名ニツキク

小舟が来て 海士の呼び聲
里近し 一葉萬里の舟の道だ
帆の風に任す 夕べの空の雲の
波 月の行くへに立ち消えて霞に
浮かむ松原の影は緑にうつろひて
海岸そことも知らぬ火の筑紫の
海にや續くらん 歌中 舟カニ とは八島の

○小謡

浦傳ひ海士の家居も數々に釣の
いとまも波の上。釣のいとまも波
の上。霞み渡りて伸行くや。海士
の小舟のほのぼのと見えて残る
夕暮。浦風までもものどかなる。春
や心を誘ふらん。春や心を誘ふらん。

口小書ノ時
打切アリ

シテ詞
まづまづ塩屋に帰り休まらざる



塩屋の主人の描り

塩屋の主人アルジの歸りてゐる。立ち
 越え宿ヤドを借らばやと思ひヒラカいかに
 これなる塩屋の内へ案内申しツレ
 誰サナリにて渡りツレいぞ 諸國一見の僧
 に来てゐる。一夜の宿を御貸しツレ
 暫く御待ツレちらツレいへ主アルジにその由申しツレ
 べヒラカいかに申しツレい。諸國一見のお僧の。



お宿の主人の描り

一夜のお宿と仰せツレい 易ミテき程の御
 事なれども餘アマりに見ミ苦クくツレい程
 にお宿は叶ツレまツレき由申しツレいへ
 お宿の事を申ししてツレいへば餘りに
 見ミ苦クくツレい程に叶ツレまツレき由仰せ
ツレいツレいツレいツレ見ミ苦クくツレしツレきは苦クしからず
 殊ツレにこれは都方ニヤコの者にてこの浦

始めて一見の事にてゆが。日の暮れ
てゆへば。平ヒラに一夜と重ねて御申しゆへ
心得申しゆ。唯タラカ今の由申してゆへば。
旅人は都の人にて御入りゆが。日の暮れ
てゆへば。平ヒラに一夜と重ねて仰せゆ
なミテに旅人は都の人と申すか。おさんび
げミテに痛はしき御事かな。さらばお宿

を貸し申さん。もとより住家も
蘆アの屋シのヤ。たミテ草枕クサマクと思マカし召メせ
しツかも今宵は照りもせず。曇りも
果てぬ春の夜のツク朧トウ月夜ツキヨにノくも
のノもなき海士ウミシのノ苔コケ。八島ヤシマにノ立てる
高松タカマツのノ苔コケのノ筵シロは痛はしキや。○さて
慰なぐさみは浦ウラの名ナのノ切キ。さて慰なぐさみは浦ウラの

○小謡



旅の道に逢はせ

名の群れ居る田鶴を求覽せよ。など
か雲居に帰らざらん。旅人の古里も
都と聞けばなつかしや。我等ももも
はとてやがて涙にむせびけりやがて
涙にむせびけり。いかに申しゆ。何と
やらん似合はぬ所望にてふへども。
古この所は源平の合戦の巻と承



りてふ。夜もすがら語つて御聞か
せゆへ。易き向の事語つて聞かせ
申しゆべし。いでの頃には元暦元年
三月十八日の事なりしに。平家は
海の面一町ばかりに船を浮かめ。源
氏はこの江にうち出で給ふ。大將軍の
御出立には。赤地の錦の直垂に紫

裾濃の御著背長。鎧ふんばり
鞍笠につつ立ちあがり。一院の御
使。源氏の大將檢非違使五位の尉
源の義経と。名乗り給ひし御骨
がら。あつばれ大將やと見えし。今の
やうに思ひ出でられては。その時
平家の方よりも。言葉戦ひ事終り。

兵船一艘漕ぎ寄せて。波お際に
下り立つて陸の敵を待らかけしに
源氏の方にも續く兵五十騎ばかり。
中にも三保の谷の四郎と名乗つて。
真先かけて見えし處に。平家
の方にも悪七兵衛景清と名乗
り。三保の谷を目がけ戦ひしに

ミテ詞 確カリ

かの三保の谷はその時に太刀打ち

折つて力なく少し汀に引き退き

しに景清追つかけ三保の谷が

著たる兜の鏝を掴んで後へ引

けば三保の谷も身を遁れんと

○獨吟



前へ引く互にえいやと引く力に
鉢附の板より引まらきつて左右へ



くわつとぞ退きにけるこれを
とて判官お馬を汀にうち寄せ給
へば佐藤・能登殿の矢先にか



つて馬より下にどうと落つれば
船には菊王も討たれければ共に
あはれと思しけるが船は沖へ陸は陣
に相引きに引く汐のあとに岡の聲



絶えて磯の波松風ばかりの音こ
 みくぞなりにつけるヨロク不思議な
 りとよ海士人のあまり委しき物
 語その名を名乗り給へやシテ上わが名
 を何と夕波の引くや夜汐も朝
 倉や木の丸殿にあらばこそ名乗
 りをしても行かま地上げにや言葉



を聞くからにその名ゆかしき老人
 の昔を語る小忌衣地頃しも今
 はシテ春の夜の潮同の落つる曉なら
 ば修羅の時にならぶしその時はわが
 名や名乗らんとさひ名乗らずとも
 名乗るともよしつねの浮世の夢は
 し覚まし給充なよ夢はし覚まし

繪ふなよ中入間

早詞 関カメニ

不思議や今の老人の。その名を
尋ねし答へにも。よしつねの世の

夢心。覺まささで侍てと聞えつる

四上歌未スラリ
待詠

聲も更け行く浦風の聲も更け
行く浦風の松が根枕軟く。思ひを
のぶる苔筵。重ねて夢を侍ちるた



後三義經上
一声ツヨク
拍三合ハズ

り重ねて夢を侍らるたり

落花枝に帰らず。破鏡ふたたび照ら

さず。然れどもなほ妄執の瞋恚とて。

鬼神魂魄の境界に歸り。われと

この身と苦しめて。修羅の巷に寄り

来る波の浅からざりし。業因かな

不思議やなはや曉にもなるやらんと。

早カル上

八尋

思ニ寝ネ覚ザのノ枕マよりリ。甲カ冑ウをヲ帶タイし
見ミえ給タマふハ。もし判ハ官クにテまますカ

三子詞

われ義経が幽霊なるが。瞋恚シに引



かるカ妄マ執ツにてテなはほは西サイ海カイのノ波ハにテ漂タひヒ。生死シのノ海カイにテ沈チ淪リンせり。おおろろかかや
なな心ココロからラここそそ生イ死シのノ海カイもモ見ミゆれ
真マ如ニのノ月ツキのノ春ハルのノ夜ヨなれども曇クモり



○小巻



本の身ながら

中ナカななままきき心ココロもモ澄スめる今イマ宵ヨのノ空カラ昔ムカシとト今イマ
にニ思オモひヒ出デづる。船フネとト陸チカラどの合カ戦ゼンのノ
道ミチ所トコロからラそそ忘ワれえぬぬ。武ブ士シ
のノ八ヤチ島シマにニいいるるやや槻ツキ弓ユミのノ八ヤチ島シマにニいいるる
やや槻ツキ弓ユミのノ本ホのノ身ミななががらら又マタここにニ
弓ユミ箭ヤのノ道ミチはは迷マヨははぬぬにニ迷マヨひひけるるぞぞやや
生シ死シのノ海カイ山ヤマをヲ離ハれれややららでで歸カエるる八ヤチ島シマ

海と八重の権めしや



の恨めしや。どにかくに執心の残りの
 海の深き夜に。夢物語申すなり。
 夢物語申すなり。
 閻浮の故郷に。去つて久しき年
 波の夜の夢路に通ひ来て。修羅
 道の有様現すなり。思ひぞ出
 づる昔の春。月も今宵に冴えかへり



同

もとの渚はそなれや。源平互に
 矢先を揃へ。船を組み駒を竝べて。
 うち入れうち入れ。足なみに鏖を浸
 して攻め戦ふ。その時何とがた
 りけん。判官弓を射り落し。波に
 ゆられて流れしに。その折しも
 は引く汐にて。遙かに遠く流れ行く

八景

三

○切逆難子

を^{ニテ詞確カリ}敵に弓を取られどと。駒を波^{ナミ}
 間に泳^{オヨ}がせて。敵^{テキ}船^{セン}近^{チカ}くなりし程
 に^{地上}敵^{カタク}はこれを見^ミしよりも。船^{フネ}を
 寄^ヨせ熊^{クマ}手に懸^ケけて。既^{スデ}に危^{アヤシ}く見え
 給^{タマ}ひに^{ニテ詞カシテ確カリ}「されども熊^{クマ}手を切^キり
 拂^{ハラ}ひ。終^{マタ}に弓を取^{トル}り返^{マゼ}し。もとの
 渚^{ナギサ}にうち上^{アガ}れば。○その時^{トキ}兼^{カネ}房^{フサ}申^{マウ}

すやう。口^{クチ}惜^{オソ}しの御^ミふるまひやな。渡^{ワタ}
 邊^ヘにて景^{ケイ}時^ジが申^{マウ}し。も。これにて
 こそへ。たどひ千^チ金^{キン}を延^{ノビ}べたる御^ミ弓^{ユミ}
 なりとも。御^ミ命^{ノチ}には代^カへ給^{タマ}ふべきかど。
 涙^{ナミダ}を流^{ナゲ}し申^{マウ}しければ。判^ハ官^{カン}これ^ノを
 聞^キし召^メし。いやと弓^{ユミ}を惜^{オソ}しむにあら
 ず。義^ギ經^{キョウ}源^{ゲン}平^{ヘイ}に弓^{ユミ}矢^ヤを取^{トル}つて私^シ

八五

十一

なし。然れども。佳名は未だ半はな
 らず。さればこの弓を敵に取られ
 義経は。小兵なりといはれんは。無
 念の次第なるべし。よしそれ故に
 討たれんは。力なし。義経が。運の極
 めと思ふべし。さらすは敵に渡さじ
 と。波に引かる。弓取の名は。未代

口切手モアリ



また内膳通方の像

に。あらずや。と。語り給へば。兼房とて。そ
 の外の人までも。皆。感涙を流しけり。
 智者は。感はず。勇者は。恐れずの。孫
 猛心の。梓弓敵には。取。傳へじと。惜しむ
 は。名のため。惜しまぬは。一命なれば。身
 を。捨てて。こそ。後記にも。佳名を。留む
 べき。弓筆の。跡なるべけれ。また。修羅

シテ上

明引シテ

チトル

ニ

同

受ケテ

シ

ニ

サ

シ

○獨吟
○仕舞



あつちのちのち
あまはちのち



船は海の声

川

上

道の岡の聲 地上 矢叫びの音 震動せ
 り翔 ○けいの修羅の敵は誰そなに
 能登の守教經とやあらものもの
 ーや手竝は知りぬ 思ひぞ出づる
 壇の浦の その船軍今は早その
 船軍今は早閣浮に歸る生死の
 海山一同に震動して 船よりは岡

舟の波の聲



舟の波の聲



の聲 陸には波の楫 月にらむは
 一 船の光 潮に映るは 兎の星の影
 水や空空行くも又雲の波の撃ち
 合ひ刺し違ふる 船軍のかけひま
 浮き沈むとせし程に 春の夜の波
 より明けて敵と見えろは群れある
 鳴岡の聲と聞えろは浦風なり

八高

上

けり高松の浦風なりけり高松の朝嵐とぞなかりにける。

鶺鴒小町

作者 不詳

曲 四番目(略三番目)
 柄 不定
 季節 重習 中傳
 編 近江國大津關寺
 所 古順

梗概

新大納言行家(ワキ)、陽成院の勅を奉じて、近江國關寺に小野小町を訪へば、小町(シテ)憔悴と衰へたる老體を杖に縋りて、都路の物乞より歸り来る。行家則ち帝より賜はれる御憐みの御歌を示して、「雲の上はありし昔に變らねど、見し玉だれの内やゆかしき」と詠吟せしに、小町、今は歌詠む氣力もなけれど、申さぬは恐れなれば、唯一字にて返歌を申さんといふ。行家、そは狂氣の言葉やらんと怪しめば、いやとよ、「て」といふ文字こそ返歌なれ、御歌の「内やゆかしき」を「内ぞゆかしき」と詠む時は即ち小町が返歌なりと答へ、かゝる返歌を鶺鴒返しといふなりと、様々歌道を語りて、過ぎ來し方の榮花を思ひ出で、今の落魄を歎ぐ。行家話題を轉じて、業平が玉津島に於ける法樂の舞をまなび給へと求むれば、小町往時を偲びて、よろめく足を踏みしめつゝ舞を奏せしが、やがて日も暮れ行くまゝに、行家都に歸れば、小町は涙ながら柴の庵に留まりぬ。

謡ひ方

重習中傳にして、三老女(關寺小町、檜垣、姥捨)に次ぐ老女物にて、文意は關寺小町の姉妹曲とも云ふべき老悴の小町が、憐みの歌を下さるゝ勅使に對し、返歌を奉ると云ふものなれば、強からず弱からず、衰へたるも優美の内に品位を落さず、老女の位を取るべきなり、古は能の形もありしなれど、現今にては素謡のみにて能には勤めざるなり。
 △シテ 百年の姥なれば、凡て位も閑かに調子を抑へて、一聲は寂しく出で、下歌上歌もしんみりと、ワキとの掛合はやさしく品よく、「あらありがたや候」より慎ましく、サシより稍引立てゝ、「さても業平玉津島に」より寛たりと、切は長閑にしつとりと謡ふ。
 △ワキ 重習のワキにして、大納言なる位を取り品位を失はず、シテとの掛合も慎重に、荒立たぬ様に謡ふ。
 △地 初同「立ち出で見れば」と調子を控へて、氣色を眺むるなれど花やかにならぬ様に、しつくりと淋しき心に、「此歌の様を」と稍引立てめに、クリは少しく引立てゝ、サシは速

びを付け、クセは位を保ち寛たりと、上端は引立て、段々と
開め、「玉津島に参りつゝ」と稍はんなりと、切のシテとの掛
合は伸んびりと、「杖にすがりて」よりしつとりと寂しく、留
を閉めて讀ひ納むべし。

語釋

鸚鵡小町 — 阿佛鈔に、「小町老い衰へて後、大内をゆかし
けに見物申しけるに、大内の女房たち見て、小町がはてなる
と云ひ、又それには無きなど云ひ争ひけるが、ある女房の
云ひ給ふやうは、歌をよみかけて心を見給へ、小町ならば返
歌をすべしと云ひければ、歌をよみかけたるに、「もとの身
のありしすみかにあらねどもこの玉だれの内やゆかしき」と
よみて返歌したり」とあれども、小町は元來大内には住まぬ
なり。玉だれの内とはすだれの内の事なり。又寢覺記に、「中
納言重範聊配所より歸りて、内へ参り給ふ時、局わたりし給
ふを、女房たち見給ひて、「雲の上は有りし昔にかはらねど
見し玉だれの内や戀しき」と書きて投げ出しけるを、重範聊
見給ひ、をりふし向ひより小松の大匠來給ひしかば、返しに
及ばず、燈籠の火をかきあけ木のはしにて、やの字を消して、
ぞと云ふ字を傍に書きて返し通り給ひしとなん」などあるを
取合せて鸚鵡小町と作り替へて、一つの物語にせしなるべし。
是は陽成院に仕へ奉る云々 — 帝王編年記に、「五十七代陽

成天皇諱貞明清和天皇太子母皇太后藤原高子號三條后贈太
政大臣正一位長良二女貞觀十年戊子十二月十六日乙亥誕
於樂殿院二十一年己丑二月一日立太子二十歲十八年丙申十一
月二十九日受禪十九年丁酉正月三日即位豐樂殿御年十御宇
八年都平安宮天曆三年己酉九月十日庚戌出家同二十九日崩
御八十二奉移圓覺寺ことあり。行家の系圖未考なり。當時
大納言は十人の定めありて、其末座を新大納言といふ。
關寺 — 近江國大津市の西端にして逢坂山の東にあり。
松坂、四の宮河原、四つの辻 — いづれも京都より關寺に至
る地名。

昔は芙蓉の花 — 芙蓉は蓮の事をいふ。李白の詩に、「昔作
芙蓉花、今爲斷腸草、以色事他人、能得幾時好」と。又
格物叢話に、「芙蓉之名二出於水者謂之草芙蓉出於陸者
謂之木芙蓉」とあり。
膚は凍梨の梨の如し — 爾雅に、「考而凍梨、色似浮垢」と
ありて、註疏に、「凍梨老色也」とあり。
かゝらざりせばかゝらじと — 後拾遺集に載す、懷圓法師の
歌、「見るたびに鏡の影のつらきかなかゝらざりせばかゝら
ざらまし」とあるを引く。
牛馬の通路 — 大津街道をさす。
豐驗の山 — 比叡山を指せるなるべし。

松風も匂ひ — 藤原實隆家集に、「散りかゝる花のささ波吹
きよせて松風にはふ志賀の辛崎」とあるを引く。
花薄穂に出て初めて — 古今集の序詞に、「今の世の中色につ
き、人の心花になりけるより、あだなる歌、はかなきこと
のみいでくれば、色好みの家にうもれ木の、人しれぬ事とな
りて、まなる處には、花すいさ、ほに出だすべき事にもあら
すなりにけり」とあり。花すいさは穂に出だすにかゝる序詞
で、穂に出では公然と顯はる意なり。

古き流れを汲んで — 古今集の序詞に、「をのゝ小町は、い
にしへのそとほり姫のながれなり。あはれなるやうにて、強
からすいはど、よき女の惱めるところあるに似たり。つよか
らぬは、をうなの歌なればなるべし」とあるによる。天臺止
観に、「挹し流尋源開香討根」とあるをいふ。

長歌 — 五言七言五言七言をつゞけ行きて、終りを五言七言
七言にて留むる歌をいふ。異説頗る多し。詞林采葉に、「東
三條入道左大臣圓融院へ奉る皆長きを長歌とし、短きを短歌
とし侍るなり。又五條三品京極黃門共に長きを長歌、短きを
短歌と分明に被注置」と云々とあり。

短歌 — 五七五七七、三十一言の歌をいふ。
旋頭歌 — 五七七五七七、三十八言の歌。古今集第十九卷、
雜體、旋頭歌に載す、讀人不知の歌、「うち渡す遠方人に物

まをすわれ、そのそこに白く咲けるはなにの花ぞも」とあり。
セドウカと讀む。六帖にはセンドウカと書きたり。漢字序に
は、旋頭、混本と並べたり。然し一體兩名なり。混本は又双
本ともいふ。旋頭はかみにめぐらす、混本は本にまじふる、
双本は本にならぶるの意にて、本の句五七七に對するに、末
句もまた、五七七を以て仕立てたる一體なり。即ち本末相互
の問答を専らとなしたるは、紀記に其例見たる如くなり。
かくて本末いづれにもまれ、その五七七の一句をさして、片
歌と稱へたり。これ旋頭歌にして、奈良朝時代には相當に盛
なりしものと思はる。古今素純抄に、「文字の心はかしらに
めぐると云ふ心なり。又はじめにかへるやうの心なり。三十
一字の歌に一句あまりたる歌を云ふなり。はじめにかへる義
なり」とあり。

折句 — 五言の詞を一言つゝ句の頭におきてよめる歌をいふ
古今集第九卷、羈旅歌に載す、在原業平の歌、かきつばたを
「唐衣きつゝなれにし妻しあればはるゝ來ぬる旅をしぞお
もふ」とあるが如きをいふ。即ち題の詞を一字つゝ句の頭に
置きてよむ歌なり。

誹諧 — 雅言もてよみたる狂歌をいふ。古今集第十九卷、雜
體、誹諧歌に載す、題しらす、讀人不知の歌、「梅の花見にこ
そ來つれ鶯の人く人くといひしもをる」とあり。又素性法

師の歌に、「山吹の花色ごろもぬしやたれ間へど答へすくらな
しにして」とあり。史記の註に、「滑稽誹諧也」とありて、を
かしたはれ言を誹諧といふ。杜甫の詩にも誹諧體あり。桐
火桶に、「古今の誹諧は相傳の人全くなし。公任卿に御堂殿
間給ひしかども、終に秘し申して知らずと答へ申されけると
かや。古今の大事此事なり。人毎に唯、誹諧とは狂歌を云ふ
と心得たる計りにて侍る程に、小智の妨にて至極を知らぬな
るべし。誹諧と申すは體は利口なり、物をあざむきたる心な
るべし。心なきものに心をつけ、物いはぬものをいはせ、利
口したる姿なるべし。可秘事なり。」とあり。

混本歌——五七五とつとけたる歌をいふ。安部清行の歌に
「朝がほの夕かけまたすちりやすき花の世ぞかし」とあるが如
きなり。

週文歌——上から讀みても、下から讀みても同じ詞なるをい
ふ。「をしめどもついにいつもとゆくはるは悔ゆともついに
いつもとめじを」とあるが如し。

歌のさまさへ女にて——古今集の序詞に、「つよからぬは女
の歌なればなるべし」とあるをいふ。

和歌の六義——古今集漢文の序詞に、「和歌有六義、一曰風、
二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌」とあるをいふ。
業平なほ動きほこり——紫色に竹の子の始めて生ひたるをい

ふ。白氏文集に「青蛾選舞應争妙紫笋齊嘗各開新」とあり。

梨花は名のみなりしかど——白氏文集に、「玉容寂寞淚欄干、
梨花一枝春帶雨」又詩人玉屑に、介甫云く、「梨花一枝春
帶雨、桃花亂落如紅雨」とあるにて知るべし。

稻荷山——京都の南部にあり。

萬葉の里——河内國北河内郡にあり。

和歌吹上——紀伊國海草郡和歌の浦にあり。

僧夫摺——伊勢物語に、業平の着たること見えたればかくい
ふ。福島縣信夫郡の名産。

和光の光——老子に、「和其光同其塵」とあるを引く。

和歌の浦に汐満ち來れば云々——萬葉集、山部赤人の歌に、
「和歌の浦に汐満ちくれば鴻を無みあしべをさして田鶴なき
わたる」とあるを引く。

月にはめてじ云々——古今集第十七卷、雜歌上に載す、在原
業平の歌、「おほ方は月をもめでじこれぞこの積れば人の老
となるもの」とあり。歌意は、月は面白いものである。然し
大概の事には左様に賞讃もされまい。何故なれば、度々月が
重なれば此人間の老年となるが故であるとの意。

時人を待たぬ習ひ——陶淵明の詩に、「盛年不重來、一日難
再晨、及時當勉勵、歲月不待人」とあるをいふ。光陰矢
の如し、一度放せば再び返らずとの諺なり。

行家詞重シモリ實カニ

これは陽成院に仕へ奉る新大納言

行家にてゆゑさてもわが君敷島の

道に御心をかけられ普く歌を

撰せられゆゑも教慮に叶ふ歌なし。

こゝに出羽の國小野の良實が女に

小野の小町かれは雙びなまきの歌の

鸚鵡小町

素謡座席頃 ワシキテ

上手にてゆが。今は百羊の姥となりて。
 關寺邊にある由聞しめし及ばれ。
 帝より御憐みの御歌を下されぬ。その
 返歌により。重ねて題を下すべま
 との宣旨に任せ。唯今關寺邊小野
 の小町が方へと急ぎゆ
 身は下われは誰をか松坂や四の宮

シテ小町上
 一セウ
 ヨウク
 拍子二合ハス

○小謠

河原四の辻。いらふ又六つ。の巷ならん
 昔は芙蓉の花たりし身なれども。
 今は藜薔薇の草となる。顔はせは憔悴
 と衰へ。膚は凍梨の梨の如し杖つく
 ならで。は力もなし。人を恨み身を
 かこち。泣い。つ笑う。つ安からねば。
 物狂と人はは。い。う。上歌。ま。つ。ま。は。捨。て。ぬ

鴨鳴小町

二

命の身に添ひて。捨てぬ命の身に
 添ひて。面影に九十九髪。からざり
 せばからざりと昔を戀ふる忍び音の
 夢は寢覺の長き夜を。能き果て
 たりなわが心能き果てたりな
 わが心。いかにこれなるはふ町にて
 あるか。見奉れば雲の上人にて

ましますが。小町と承りゆかや何
 事にてゆぞ。さてこの程は何處を
 すみかと定めけるぞ。誰留むると
 はなけれども。たゞ閑寺邊に日數
 を送りゆ。げにげに閑寺はさす
 かに都遠からで。閑居には面白き
 所なり。前には牛馬の通ひ路あつて。

○小謠

貴タツトきも行き賤イヤきも過ワカぎ上 後ウケテには
 靈レイ験ゲンの山ヤマ高タカうウして 下シテかも道ミチも
 なく 春ハルは 春ハル霞カスミ 上ウケテ歌カ同トウ 立タチち出デで
 見ミれば深フカ山ヤマ邊ヘのホ立タチち出デで見ミれば
 深フカ山ヤマ邊ヘのホ指ササにかカるル白シラ雲クモは花ハナかど
 見ミえて面オモ白シロや松マツ風カゼも白シロひヒ枕マクラに
 花ハナ散チりてぞソれとトばバかりリに白シラ雲クモの

色イロ香カ面オモ白シロき景ケ色シキかなナ北キタに出イづ
 れレは湖ウミの志シ賀ガ卒ソツ崎サキのチ一ヒトつ松マツは身ミの
 類ルイひヒなるナるルものモノをヲ東ヒガシに向ムクはハあリかタや
 石イシ山ヤマの親オヤ世セ音ネ勢セ田タの長ナガ橋ハシは狂キヤウ人ジン
 のノつツれレなナき命イノチのノかカるルたタめメなるナ
 べベ。かカくて都ミヤコの戀コイき時トキは紫ムラサキの
 庵イホリに暫トド留ドむムべき友トモもなナければ

カル中^抑より梨の杖に縋り都路に出て
 物をも乞ふ。乞ひ得ぬ時は涙の園寺
 に帰る。いかに小町。さして今も
 歌を詠みよべまか。われ古百家
 仙洞の交はりたりし時こそ。事に
 よそへて歌をも詠みしが。今は花
 薄穂に出でてそめて。霜のかれる

有様にて。浮世にながらふるばかりにて
 げに尤も道理なり。帝より御憐みの
 御歌を下されてゆ。これこれ見ゆへ
 何と帝より御憐みの御歌を下され
 たらとや。あらありがたや。老眼と
 申し文字もさだかに見えわかずゆ。
 それにて遊ばされゆ。

豊武心
豊武心
豊武心

三

聞きゆへ ミテ 閑カニ いかにも高らかに遊ば

されゆへ ワキ 寛ク 雲の上は ミテ 閑カニ 雲の上は

早カ止未 雲の上は ウキリ ありし昔に變らねど カ

見玉だれの内やゆかき ミテ 詞 仲 あら

面白の御歌や カル 中 悲しや ナ な フル 古き ナ 流れ

を汲んで ミ 水上 カ を正すとすれど ミ

歌詠むべ ミ とも思はれず 詞 持 又申さぬ

時は恐れなり オ 所詮 シヨ この返歌 ヘン をた

一字にて申さう ワキ 時 範 不思議の事を

申す者かな カ され歌は三十一字を

連ねて ツラ だに ニ 心の是 タ らぬ歌もあるに

一字の返歌と申す事 カル 上 これも キ 狂氣 キ の

故 ニ やらん ミテ 詞 いや ウ ぞ ケ といふ モ 文字 ジ こそ

返歌なれ ワキ ぞ ウ といふ ケ 文字 ケ とは ウ こそ

鶴鳴小町

六

いかにミテ「もらば帝の御歌を。詠吟エイギンせ給べ」
 不審フキウケンながらも
 上ウヘ「上げて。雲の上はありし昔に愛アイらねど。見し玉だれの内やゆかしまミナトらればこそ内やゆかしまを引まヒキマつけて。内ぞゆかしまと詠む時は。
 小町が詠みたる返歌なり
フキカレ上

古もかゝるためしのあるやらん
 なるミテ「鳥鶴返」といふ事はこの
 歌の核を申すなり。帝の御歌を。
 ばひ参らせして詠む時は。天の恐れも
 如何ならん。和歌の道ならば神も
 許しおほしませ。貴からずして。
 高位に交はるといふ事たる和歌の

○獨吟

徳とかがやたゞ和歌の徳とかがや
クリ地上 それ歌の模を尋ぬるに長歌短歌
赤掛 旋頭歌折句詠諧混本歌鸚鵡
拍子合 返し廻文歌なり ○なかんづく
 鸚鵡返しといふ事。唐土に一つの
 鳥あり 同 その名を鸚鵡といへり。今
 いふ言葉をとらけて。即ちあのが

轉りとす。何ぞといへば何ぞと答ふ。
 鸚鵡の鳥の如くに歌の返歌も。
 かくの如くなれば。鸚鵡返しとは
 申すなり ヤ げにや歌の模語るに
 つけ古のなほ思はるはかなさよ。
 されば来し方の代々の集めの歌人の
 その多くある中に。今の小町は

妙なる花の色好み歌の様さへ女
 にてたが弱々と詠むところ家々の
 書傳にも記し置き給へり
 和歌の六義を尋ねしにも
 町が歌をこそとたがこと歌のため
 くに引くのみかわれながら美
 人の形も世に勝れ餘情の花と

作られ桃花雨を帯び柳髪風に
 たをやかなり紫筆なほ動き誇
 り梨花は名のみなりかど今
 憔悴と落ちふれて身體疲瘁
 する小町ぞ哀れなりける
 小町業平玉律島にて法樂の
 舞をまなびゆへ

御神

カ

島に参り給ふと聞えればわれも
 同く参らん。都をばまだ夜を
 こめて稻荷山。葛葉の里も浦
 近く和歌吹上にとりかり玉津
 島に参りつ。玉津島に参りつ。
 業平の舞の袖思ひ廻らす信夫
 摺木賊色の袴衣に火紋の袴の

後を取り。風折鳥帽子召されつ
 和光の光玉津島廻らす袖や
 波がこり舞
 和歌の浦に潮満ち来れば。海を
 なみの。蘆邊をさして。田鶴
 鳴きわたる鳴きわたる。立つ名
 もよくなや忍び音の立つ名もよ

鳥下

ト

巻八 十

七

くなや忍び音の月には愛で
シテこれぞこの地上積れば人の地上老と
 なるものを地上かほどて早き光の陰
 の時人を待たぬ習ひとは白波の
シテ上あら戀しのむかやな同上かくて
 この日も暮れ行くまに元丸心さらはと
 いひて行家都に帰りければヤ

シテ小町も今はこれまでなりと杖に
シテ繼りてよろよろと立ち別れ行
 く袖の涙立ち別れ行く袖の涙も
シテ開寺の柴の庵に帰りけりウ

巻八 十

七

葛城山

十一

葛城

世阿彌元清作

梗概

出羽國羽黒山の山伏(ワキ)峯入を志して旅に出て、程もなく大和國葛城山に着きたるに、俄かに雪降り來りて、踏み行かん山路も辨へざりし處に、一人の女性(前シテ)出で來り、わらはが庵に一夜を明かし給へと、雪深き岨を傳ひて谷の下庵に伴ひ歸る。やがて女性標を解きて火に焚き、これこそ大和舞の歌にも、「標結ふ葛城山に降る雪は、間なく時なく思はゆるかな」と詠まれて、この山に由緒あるものなれなどと語り合ひしが、山伏後夜の勤めを始めんとすれば、かの女性、われ眞はこの葛城の神なるが、法の岩橋架けざりし咎めにて、明王の案にて身を縛め、今に苦しみ堪へぬ身なり、加持して三熱の苦を除き給へと乞ひて、神隠れに隠れ失せぬ。(中人)山伏即ち夜もすがら加持をなせば、女體の神(後シテ)山陰より現れ出で、大和舞を奏して、天の岩戸の昔を偲び給ひしが、見苦しき顔かたちを恥らひつゝ、夜の明けぬ前にと、岩戸の内に入り給ふ。

葛城

曲 柄 四番目(略三番目)
 季 節 十一月
 所 古 三 級
 大和國南葛城郡葛城山

謡ひ方

雪と神女とを對照せしめ、純白の美に葛葛を加へし曲なれば、清く美しき趣にて優に氣高く閑かに謡ふ、尤もさらりめの心を失ふべからず。

△シテ 餘り位を取らずに神々しく優美に調子を内へ取りて謡ひ出し、ワキとの掛合はしつぽりと、初同後の掛合は落着を付け、クセ後の掛合は強くならぬ様に閑かに謡ふ。

△後シテ 麗はしく閑かに出で、ワキとの掛合は朗かに、「降る雪の」と閑かに、段々と閑めて謡ふべし。

△ワキ 山伏と雖も、餘り手強くならぬ様にさらりと謡ひ出し、道行はさらりと、シテとの掛合はさらりと雖も確かりと、シテとの連吟はシテの調子に合せ、待謡は朗かに、「一心敬禮」と改めて確かりと謡ふべし。

△地 初同は朗かに閑かにしつとりと謡ひ、二の同は引立ててさらりと、クセはさらりと居着かぬ様に、中入前はしつくりと閑かに、中入後「葛城山の岩橋の」は朗かにさらりと、切は乗よく花やかに清らかに謡ふべし。

11

能の異式 (小書)

大和舞 — 白の引廻しに柴と葛を葺き、雪を積みたる山の作物を出し、前シテは白綾坪折に杖と負柴あり、作物に中入し、前は引廻し取ると柱にも葛をまとい、後シテは天冠に葛を附け、緋大口に白の舞衣、袖に白木綿を附けたるを持ち、序ある神樂の形變る。

語釋

神の昔の跡とめて — 神の古跡を尋ねての意。昔、役の小角と云ひし行者、吉野の金峰山と葛城山との間に通路を作らんとて、神々を使役して岩橋を渡さしむ。葛城の神は形の醜きを恥ぢて、夜ならでは出でざりしかば、小角怒つて之を呪咀し縛して深谷に繋ぎたり。此傳説による古跡を尋ねることなり。葛城山は大和の西方にて、河内との境にある山。

羽黒山 — 羽前國東田川郡にあり。山伏の修業に登る山。

大峯 — 吉野山の奥なる峯をいふ。

篠懸 — 山伏の峯入する時に着る法衣の名。元來鈴をかけるより起りし名なりといふ。

あら笑止や — 不満足の嘆聲。

柴探る道の — 薪採りに出でたる歸路をいふ。

ふとぎ — 風交りに降る雪。積れる雪を風の吹き散らすをもいふ。

袖の雪も — 雪を廻らす袖といふ意。廻雪曲といふ舞あればしかいふ。

古き世の — 「古き大和舞の歌」と古今集に詞書あるをさす。

よそにのみ云々 — 新古今集第十一卷、戀歌に載す、讀人不知の歌、「よそにのみ見てややみなむ葛城や高間のやまの峯のしら雲」とあり。歌意は、我が思ふ人に遂に遇ふを得ずして終る事かといふ心を、葛城山の高間の峯にかゝる白雲を他所にばかり見て過すことかとの意に譬へしなり。即ち我が思ふ人に逢ひ難きを嘆息したる歌なり。

葛城や云々 — 夫木集に載す歌にて、「葛城や木のまにひかる稲妻は山伏の打つ火かとこそ見れ」とあるをさす。

電光朝露石の火の — 忽ち消え失せる様をいふ。

なげき — 嘆きを木にいひかけたなり。

捨人 — 世捨人。

苦の衣 — 世捨人は苦を衣となすといふ意。即ち佛道修行者の苦辛を形容す。

色ふかく — 法に心を染むる事の深きにいひかくなり。

そみかくた — 山伏の異名。或説には、佛經のことを染紙と云へば、染み書くの意にて、山伏の經文を書くために籠る堂室のことならんと云へるも、猶考究すべし。

後夜 — 現今の午前二時。

さだかに — たしかにとの意。

常陸 — 日影のいつもさゝぬ處をいふ。

笠は重し吳山の雪、香は香ばし楚地の花 — 詩人玉屑に出でたる詩句。原文には笠重吳天雪、鞋香楚地花とし、吳山を吳天とあり。吳も楚も共に支那の地名。

肩上の笠には云々 — 肩に笠傾き無影月、擔頭柴折し不香花、古註に此詩出所分明ならずとあり。雪の笠に積りたるを形容して影なき月を傾けと云ひ、背負ふ眞柴にかゝれるを香はぬ花を折り添へたるに譬へていふ。

山人の笠も薪も埋もれて — 雪こそくだれ谷のしたみち、菅家御集に載す歌なり。歌意は、山人の身はずべて埋もれたれば、雪のみ谷を下るやうに見ゆるとの意なり。

是なる標 — 背負ひたる標をさす。薪にする若木を標と云ふ。申すにや及ぶ — 申すまでもなしとの意。

大和舞 — 大嘗會の御儀式に行はるゝ舞曲の名。

しもとゆふ葛城山に云々 — 古今集第二十卷、大歌所御歌に載す、詞書に、ふるきやまとまひの歌、「しもとゆふ葛城山にふる雪の間なく時なくおもほゆるかな」とあり。歌意は、彼の葛城山に雪の降らぬ間のないやうに、何時といふことなしに君のことが心にかゝつて忘れぬ隙がないとの意。即ち大和舞の歌、しもとゆふは葛城の枕詞なり。

加持 — 佛法の教ふる祈禱のことにて、多く眞言宗にて用ふる語。又加被ともいふ。加とは、力を與へて加護するをいひ、持とは、攝持して失はざるに名づく。されば、佛の心の凡夫衆生の心中に印現するを加といひ、行者の心の能く佛心を感じるを持といふ。或は行者、佛の本誓を念するを加となし、佛の大悲の能く行者の誠心を攝受するを持とす。天臺宗に云ふ、感應道交と共に全然同じきなり。事相に就て解釋すれば、或は供物を加持する法、壇場を加持する法、息災延命を加持する法等をいひ、印相を結び五結、三結、獨結等を用ひ、護摩火を燒き、陀羅尼を唱へながら、觀想を以て或る事物を加持する法を修するをいふ。

五障の罪 — 女は罪深くして五箇條の障害ありと佛敎に説示せるをいふ。即ち一には梵天王とならず、二には帝釋とならず、三には魔王とならず、四には轉輪聖王とならず、五には佛とならずと説くことなり。

法のとがめの呪咀 — 役の小角に呪咀せられたるをいふ。

三熱の苦しき — 一には熱風熱沙身に著き、其皮肉骨髓を燒き苦惱をなす、二には惡風吹き起りて、蛇龍の居所及び師衣等を失はしめ、龍身を苦惱せしむ、三には諸龍娛樂の時金翅鳥あり、龍の居所に入りて生るゝ所の龍子を搏奪して之を食ひ、龍をして畏怖せしむることなり。法華句文に詳説せり。

法の岩橋 — 法の爲の岩橋。架けざりしは夜役だけにて成就せざりしをいふ。

明王のさつくにて — 不動明王は左手に縛繩を持つ、これは諸悪作煩惱を縛束するにいふ。

石はひとつの — 葛にて纏はれたる石を神體に比していふ。撫づともつきじ云々 — 拾遺集に載す歌に、「君が代は天の羽衣まれにきて撫づともつきぬ巖なるらん」とあるをいふ。

磐戸 — 岩屋のこと。

明るるわびしき云々 — 拾遺集に載す歌に、「岩橋の夜の契りも絶えぬべし明るるわびしき葛城の神」とあるを引用す。

葛城の神は夜のみ出づれば、明るる空がつかきをいふ。

五衰の苦しみ — 天上の快樂も命終るときは、五衰の相現すといふ佛教の説をいふ。

岩橋の末絶えて — 岩橋の全く成就せざりしかば、末の續かぬまゝにて止みたるを、言葉の末の絶えたるにかけていふ。

法味 — 佛教を修行して其眞味を悟ること。

無上正覺の月 — 迷を去りて無上の尊き悟りを開きたる心を月の明らかなるに譬へていふ。

法性眞如の寶の山 — 開悟徹底して佛道を得たる心を、寶の山に譬へて葛城山の事に云ひかく。

小忌衣 — 祭服の名。

間狂言

夜のなりたる古事によりて、夜の磐戸と續けたるなり。

所の者出で、ソキと問答し、葛城明神の山緒を語り退く。
是は葛城山の麓に住む者にて候。今日は一段の天氣なれば、山に登り薪をこらばやと存する。いや是に見馴れぬ客僧達の御座候よ。なう／＼方々は何とて此所には休らふて御座候ぞ(此間せりふ常の如し)さる程に昔役の行者つく／＼と思はるる様。一度はこの山に分け入り。悪魔を鎮め國土安全になすべしと思ひ給ひ。即ち大峯葛城を踏み分け給ふ故。山に於て先達衆は本山當山とて二手に分けて、毎年恙なく峯入を遊ばし。殊に峻しき峯を越され。朝暮の御祈禱怠慢なく誠に難行苦行淺からざる故。佛法繁昌のめでたき御代にて御座候。しかるに役の行者と申すは。生國は大和の國の人なるが。世の常ならぬ御方にて候ぞ。四方の山々を眺めやり思ひ給ふ様。葛城山吉野の御嶽大峯を見渡せば。如何にも程近き様にはうち見えて。谷峯を越され殊の外難所なれば。葛城より大峯まで岩橋をかけ客僧達の通ひ路になされたきとて。このよし一言主の御神へ仰せらるれば。尤もとて御同心ありし程に。俄かに巖を運はせ積み重ね。種々様々の計略を廻らし給ふとはいへども。當社は女體にて在せば。晝は御姿恥かしく思ひ召す間。夜な／＼橋をかけうすると仰せられ。彼方此方と様々あ

山かづら — 山の草木などを鬘に懸くる事。又特別には、神樂の時に正木の葛を頭にかくるをいふ。

かけて通へや — 山葛をかくるといふを、大峯と葛城とかけて通ふことにつゞけたり。

高天の原は是なれや — 岩橋の高きと云ひかけて、天上なる高天の原は是にやの意につゞけたり。高間の山とは葛城内の小宇名なれば、これを含めて云ひしなり。

神樂歌はじめて — 高天の原ならば、岩戸の前の古事ある神樂歌を始めんとすの意。

木綿花 — 白きものなれば、白和幣に云ひかく。

白和幣 — にぎてとは、柔かき織物をいふ。神を祭るに用ふる物、又後に御幣ともいふ。さればこゝは御幣を持ちて舞ふ意につゞけたり。

磐戸の舞 — 天照大神の籠り給ひし時の古事。

天のかぐ山 — 葛城より東の方に見おろさるゝ山。天上にも同名の山ありと云へば、此かぐ山を見ていよ／＼高天の原の心地するといひかくるなり。

名に負ふ葛城の — 白妙の文字を受けて、面白き筈なれども、其面が恥かしの意。

あさま — あさましを朝間の意に云ひかく。

夜の磐戸 — 天照大神の磐戸に籠り給ひしかば、天地すべて

る内に。はや夜はほの／＼と明ければ。終に岩橋成就致さぬ事を。行者は殊の外怒り給ひ。それより肝膽を砕き祈り給へば。不動明王の索の繩にてやがて葛城の明神を縛め給ひたる。その返報をなさんと思ひ召し。帝へこの旨奏し給ふにより。色々むつかしき事どもありたる由申す。まづ我等の存じたるはかくの如くにて御座候(おぼ)。是は奇特なる事仰せらるゝものかな。御覽せらるゝ如く麓はよき天氣なるに。俄かに雪を降らし女體の姿にて此處に來り。方々を留め申されたれば。行力の達したるを御受納なされ。五衰の苦しみを免れたく思ひ召し。當山の御神假に人間と見みえ給ひ。此窟を御宿りに參らせたと推量致す。餘りに不思議なる御事なれば。末は急ぎの族なりとも今宵は此處に御逗留なされ。ありがたき御法を遊ばし。重ねては誠の神姿を再び御覽じ。その後いづくへもお通りあれかしと存する。



| 作 物 | 装束附(葛城) | | |
|--------|------------------------------|------------------------------------|---|
| | 後シテ 葛城ノ神 | 前シテ 女 | ワキツレ 山伏二人 |
| 柴(雪付) | 面、増 着附摺箔 胴箔腰帯 天女扇 | 面、深井 着附摺箔 縫腰帯 扇 女笠(雪付) | 兜巾 襦袢 着附厚板 白大口 褌水衣 繡紋腰帯 扇 薊高數珠 |
| | 天冠 黒垂 襟白赤 緋大口 長絹 | 無紅髪帯 無紅縫箔腰卷 水衣 | 兜巾 襦袢 着附厚板 白大口 繡紋腰帯 扇 薊高數珠 |

葛城

素座席頃 ワシキテ



山伏上
次下
拍子三合

神の昔の跡とめて。神の昔の跡とめて。葛城山に冬らん。これは出羽の羽黒山より出でたる山伏にて。



われこの度大峯葛城に冬らばや。と存じぬ。袖の朝霜起。臥の袖の朝霜起。臥の岩根の枕。

葛城

松が根の宿りもくげき嶺續き
 山又山を分け越えて行けば程な
 く大和路や葛城山に着きにけり
 葛城山に着きにけり 又急ぎぬ

間程なく葛城山に着きてぬ。あら
 笑止や。又雪の降り来りてぬ。これなる
 木蔭に立ち寄りばやと思ひぬ



此方の事にては

シテ女

呼掛

なうなうあれなる山伏は何方へ御
 通りゆぞ 此方の事にてはか御身は
 如何なる人やらん 此れはこの葛城山
 に住む女にては柴採ら道の帰る
 くに踏又馴れたる通ひ路とて入雪の
 吹雪にかき昏れて家路もさだかに
 辨へぬにまゝてや知らぬ旅人の末

迷ひ紛ふは道はしや



意

いづくにか雪の山路に速ひ給ふは
 痛はしや見苦しきも。わらはが
 庵にて一夜を御あかひへ嬉しく
 も仰せぬものかな。今に始めぬこの
 山の度々峰入して通ひ別れたる
 山路なれども。今の吹雪に前後を
 忘れてゆに。御志ありがたうこそ

ゆへこそ御宿りはいづくぞや。この
 姐傳ひのあなたなる。谷の下庵
 見苦しきも。程ある雪の晴間
 まで。御身を休め給へし。さらば
 御供申さんと。夕べの山の常陰より
 さらば。道知
 るべする山人の。重し。吳山の

葛城

下

○小謡



雪の庵に着きにけり



雪の庵に着きにけり

雪。昔は香ばし楚地の花。上歌同
 の笠には。肩上の笠には無影の月を。拍子合
 傾け擔頭の柴には不香の花を。ア
 手折りつ。歸る姿や山人の笠。ア
 も薪も埋もれて。雪こそそらだれ。ア
 谷の道とたどりたどり歸り来て。ア
 柴の庵に着きにけり柴の庵に。ア



雪の庵に着きにけり

着きにけり。あら嬉しや。今の雪
 に前後を忘るてい處に。今宵のお
 宿返す返すもありがたうこそいへ
 餘りに夜寒にい程に。これなら標を
 解き乱し。火に焚きてあてゑらせ
 いべし。あら面白や。標とはこの木の
 名にふか。うたてや。なこの葛城山の

雪の中にゆひ集めたる木々の梢
 を標と知らしめされぬは御心なまき
 やうにこそゆへロキカル上木「あら面白やこそは
 この標といふ木は葛城山に由緒ある
 木にてゆよなうシテ詞申すにや及ぶ
 古き歌の言葉ぞかゝ標とゆひたる
 葛なるをこの葛城山の名に寄せ

たり。これ大和舞の歌と入り
ロキカルげにげに古き大和舞の歌の昔と
 思ひ出の折から雪も降るものを
上歌同しもとゆひ葛城山に降る雪は葛城
 山に降る雪は向なく時なく思ほゆ
 るかなと詠む歌の言の葉添へて
 大和舞の袖の雪もふるき世のよそに

○独吟
○仕舞



のみに見し白雲や高間山の嶺の柴
 屋の夕煙松が枝添へて焚かりよ松
 が枝添へて焚かりよ新切葛城や木の
 間に光る稻妻は山伏の打つ火かど
 こを見ればげにや世の中は電光朝露
 石の火の光の間ぞと思へたわが
 身の歎きとも取り添へて思ひ真

はに白雲の



寒風を待つ者哉の



柴を焚かりよ新切拾人の昔の夜の
 色深く同法に心は墨染の袖もさな
 から白妙の雪にや色をとそみかくた
 のスレ條懸もさえまさる標を集め
 柴を焚き寒風を防ぐ葛城の
 山伏の名に負ふ序敷く袖の枕して
 身と体の給へや御身と体の給へや

葛城

六

早詞 確カリメニ

「あら嬉しや條懸と乾していぞや。急
 ぎ後夜の勤めを始めばやと思ひひ
 御勤めとはありがたや。われに惱める
 心あり。御勤めのついでに祈り加持し
 て給はるへ」
 「そとも御身に惱む事
 ありとは。何といひたる事やらん
 」。
 「おなまだに女は五障の罪深きに法

の処めの咒詛と負ひ。この山の名に
 一負ふ。葛葛にて身を縛めてなほ
 三熱の苦しみあり。この身を助け
 てたび給へ。そとも神ならで三熱
 の苦しみといふ事あるべきか。恥か
 しながら古の法の岩橋架けざり
 一。その処めとて明王の索にて

身と縛めて。今に苦しみ絶えぬ
 身なり。これは不思議の御事な。
 さては昔の葛城の神の苦しみ盡
 まがたき。石は一つの神體として
 葛城の又がる巖の。撫づとも
 盡き。葛の葉。はひ廣がりて
 露に置かれ。霜に責められ起



下歌同
 臥の。立居も重き磐戸の内
 明くるわびき。葛城の神に五衰の
 苦しみあり。祈り加持して。たび給へ。岩
 橋の末絶えて。神隠れにぞなりに
 ける。神隠れにぞなりにける。中入間
 岩橋の。苔の衣の袖添へて。苔の衣
 の袖添へて。法の筵の。そことはに。

後三女神上

出端



法味となして夜もすがらかの葛城
 の神慮夜の行ひ聲澄みて一心敬禮
 われ葛城の夜もすがら和光の影に
 現れて五衰の眠りを無上正覺の月
 に覺まし法性真如の寶の山に法
 味に引かれて来りたりよくよく勤め
 おはしませ不思議やな滅々たる山の

○切造雜子

常陰より女體の神とおぼしくて玉の
 簪玉葛のなほ懸けとへて葛葛の
 はひまとはる小忌衣これ見給へや
 明玉の索はかる身を縛めてなほ
 三熱の神慮一年ふる雪や標
 同上
 葛城山の岩橋の夜なれど
 月雲のどもいちとるき神體の見



〇〇 仕舞 獨吟
 本鼓ヲ合 拍子合
 同上 ヨル
 シテ 中田カニ
 歌始めて大和舞いざや奏てん
 岩橋の高天の原はこれなれや神樂
 よしや吉野の山かつらかけて通る
 苦しき顔はせの神姿は恥かや
 の磐戸の舞天の香具山も向ひに
 高天の原の磐戸の舞。高天の原



見えたり。月白く雪白く。いづれも
 白妙のげしきなれども。磐石に負ふ葛
 城の神の顔がたら面なやおもはゆや。
 恥かやあさまやあさまにもなり
 ぬへ。明けぬ前にと葛城の明けぬ
 前にと葛城の夜の。磐石にぞ入り
 給ふ磐戸のうちに入り給ふ。



葛城

10

讀
州

中
糸

念佛僧(ワキ)三熊野よりの歸途、大和國當麻寺に詣でしに、
一人の老女(前シテ)年若き女(前ツレ)とともに出て來り、僧
の問に應じて、染殿の井などあたりの名所を教へ、殊に當麻
寺曼荼羅の緣起について、人皇四十七代廢帝天皇の御宇、横
佩右大臣豊成の息女中將姫がこの山に籠りて、毎日稱讚淨土
經を讀誦して、生身の彌陀如來を拜まんと祈願すれば、一日
彌陀如來老尼の姿にて現れ給へりなどと語りたる後、今宵は
二月十五日時正の時節なれば、われも法事をなさんとて來れ
るなり、眞はわれらこそ古の化尼、化女なれと告げて、二上
山より紫雲に乗りて上天す。(中入)
程もなく妙音聞え光さして、中將姫の精魂(後シテ)僧の夢中
に現れ出で、淨土經の功力を説き、舞を奏して、見佛聞法の
法事をなしたが、後夜の時も過ぐれば、僧の夢は覺めて、夜
はほのほのと明け行きぬ。

當麻

世阿彌元清作

曲 節 四番目(又ハ五番目) (略利能)
季 節 二 月
稽古 九番習 高等二級
所 大和國北葛城郡當麻寺

梗概

念佛僧(ワキ)三熊野よりの歸途、大和國當麻寺に詣でしに、
一人の老女(前シテ)年若き女(前ツレ)とともに出て來り、僧
の問に應じて、染殿の井などあたりの名所を教へ、殊に當麻
寺曼荼羅の緣起について、人皇四十七代廢帝天皇の御宇、横
佩右大臣豊成の息女中將姫がこの山に籠りて、毎日稱讚淨土
經を讀誦して、生身の彌陀如來を拜まんと祈願すれば、一日
彌陀如來老尼の姿にて現れ給へりなどと語りたる後、今宵は
二月十五日時正の時節なれば、われも法事をなさんとて來れ
るなり、眞はわれらこそ古の化尼、化女なれと告げて、二上
山より紫雲に乗りて上天す。(中入)
程もなく妙音聞え光さして、中將姫の精魂(後シテ)僧の夢中
に現れ出で、淨土經の功力を説き、舞を奏して、見佛聞法の
法事をなしたが、後夜の時も過ぐれば、僧の夢は覺めて、夜
はほのほのと明け行きぬ。

謡ひ方

九番習の中にも重き曲にして、前半は彌陀如來の化尼なれば、位と云ひ品と云ひ總じて老女物に準じ、後半は中將姫の靈なれば上品にして優に、餘り重くならぬ様に心持多ければ、充分に心得て謡ふべし。
△シテ 一聲の出は調子を抑へて極閑かに、めらぬ様に謡ひ出し、「稱ふれば」より稍引立つ心にて浮かぬ様に、次第は改めて閑かにしつとりと出で、上歌は稍張りめの心にて極閑かに謡ひ、ワキ并ツレとの掛合は抑へて殊勝に、クリ後のサシは閑かに重んもり、上端も浮かぬ様に、ロンギはツレと連吟にて調子高くならぬ様に、しつとりと謡ふ。
△後シテ 優美の心にて朗かに伸々と氣高く謡ひ出し、以下だれぬ様に、地との掛合は品位を附け長閑に運び、「後夜の鐘の音」と抑へて確かりと謡ふべし。
△ツレ 餘り軽く謡はず、始めのシテとの連吟は勿論シテの位に従ふなれど、掛合はシテよりさらりの心にて、さらりと謡はず、上歌後の掛合は、シテより調子高くさらりと謡ふ。

讀
流

1

△ワキ 大口僧なれば少し位を取り、重んじりめに誦ひ出し、道行は寂味を附け浮かぬ様に、シテとの掛合も確かりと閑かに、持誦もたつぷりと誦ふべし、素誦にてはワキ一人にて誦ふ。

△地 初同は調子高くならぬ様にしつとりと切る切らずの心持多き處を心して、クリは引立てめに稍ざらりと、サシは閑かに運びを付け、クセは極閑かに確かりの内にもしつとりと、上端も浮かぬ様に、ロンギは極閑かに花やかならぬ様に、中入後は確かりとさらりの心、此シテとの乗地の掛合、拍子の合方至難の處なれば能く心して誦ふべし、切の「後夜の鐘の音」と氣高く騒がしくならず花やかならぬ様に誦ふ。

能の異式 (小書)

初能の式 — 装束が變り舞も黃鐘となる。

三番目の式

二段返し — 後シテの出端の囃子が變る。

寵の傳 — 舞の中に流しにて橋掛りへ行く形あり。

語釋

當麻 — 當麻寺の緣起に、天平寶字年中、右大臣豐成の子、中將姫この寺に入りて尼となり、一心に佛道に趣き、われ眞の彌陀を拜ますんば寺を出づまじと誓ふ。ある時一人の比丘來り語つて云はく、われ汝が爲に彌陀如來を拜ましめん、す

に移して當麻寺と改む。

岩田川 — 紀伊國西牟婁郡安堵が峯を發し、南流富田村に至り海に注ぐ。富田川の別稱。

一念彌陀佛即滅無量罪 — 心を散化せずして、一度阿彌陀佛を念すれば、いか程造り重ねたる多くの罪惡も、忽ち消滅して餘すところなし、之れ阿彌陀佛の誓願の然らしる所なり。八萬諸聖教皆是阿彌陀 — 釋迦一代の諸聖教を指す。蓋し八萬は八萬四千の略語なり。釋迦一代の諸聖教も、其意義に淺深こそあれ、皆彌陀一佛に歸せしめんがための法門に外ならず、さればその根本に就きて一切の諸教をながむれば、即ち八萬諸聖教皆是阿彌陀佛といはるとの意なり。之れ叡山横川の慧心僧都が始めていはれし語なるが如し。必竟天臺の三諦圓融の法義に基づきしことなるべし。

稱ふれば佛も我もなかりけり — 一遍上人の歌、「となふれば佛も我もなかりけり南無阿彌陀佛の聲ばかりして」とあり。匠材集に、涼しき道とは極樂のこと、納涼の體にあらずとあり。觀經に、「地獄猛火爲清涼風」とあり。彌陀三昧經に「稱南無阿彌陀佛一百遍變大地獄成清涼地」と説きあり。濁りにしまぬ蓮の絲 — 古今集第三卷、夏歌に載す僧正遍昭の歌、「はちす葉のにこりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく」とあり。歌意は、蓮は泥中に生立ちながら、其

べからく百駄の蓮葉を集むべしと。中將姫帝へ奏し給へば、

詔して蓮葉を送らしむ。其時化尼みづから葉を折り絲を取て新井を穿つて之を濯ぐ。五色燦然たり。其後又一人の女來り化尼に問ふて曰く、絲は成るや。答へて曰く成れり。化女絲を得て殿の西北の角に於て之を織る。初更より始めて四更に成就す。其幅一丈五尺。藥三把を以て油二升に浸して燭となす。(中略) 淨土の衆相悉く備はれり。中將尼大に悦び、節なき竹を求めて軸となす。而して後化女忽然と見えす。化尼偈を作り圖を禮して曰く、性昔迦葉說法のところ、佛事新に起る又故あり。君が懇志を感じて我こゝに來れり。一たび道場に至らば永く苦を離れんと。中將尼問ふて曰く、善哉知識いづくより來り給ふぞ。又先の女は誰とかいふ。答へて曰く、我は西方の教主なり。先の女は觀音大士なりと。言ひをはつて空を凌ぎて西の方に去り給ふ。中將尼これより精修ますますつとむ。寶龜六年三月十四日安座念佛して終り給ふ。年二十九」とあり。

法の門 — 新千載集に載す、後伏見院御製に、「教へおく其品々の法の門ひらくる道は一つなりけり」とあるを引く。

當麻の御寺 — 大和國北葛城郡二上山の麓にあり。二上山萬法藏院禪林寺と號す。推古天皇の皇子麻呂子王、河内國にこれを創立し、禪林寺と稱せしが、天武天皇白鳳年中、今の地

泥中の濁りに染まぬ程の潔白な心を以て、何故彼様に葉の上の露を玉として見せて人を欺くことかとの意。即ちこゝには何とて五色には染まりたるぞといふなり。元享釋書に、「化尼自折蓮取絲穿新井濯之五色燦然」とあり。

五つの雲 — 五障と同じ。女は罪深くして五つの罪障あるを雲に譬へていふ。一に梵天王となられず、二に帝釋となられず、三に魔王となられず、四に轉輪聖王となられず、五に佛となられず。山家集に載す歌に、「けふや君おほふ五つの雲晴れて心の月をみがき出づらん」とあり。

雨夜の月の云々 — 玉葉集第十九卷、釋教歌に載す歌に、「彌陀たのむ人は雨夜の月なれや雲晴れねども西へこそ行け」とあるを引く。

末の法云々 — 慈恩大師の語に、「末法萬年に餘經悉く滅し、彌陀一教佛を利することひとへに増す」とあり。榮寺 — 當麻寺の北八町許りに在り。石光寺と號す。昔天智天皇の御時、其地夜な光あり、見れば三つの大石あり、形似佛像、勅して三石をきざみ作彌勒三尊像、其上に殿閣を作りて是を安置す。染殿の井は染寺の前にあり。彼蓮の絲を染めし水なりといふ。雲玉集に、「濁りにはしまぬ蓮の絲なれどなほ色々の染殿の池」とあり。草木國土成佛 — 涅槃經に、草木成佛の偈として廣く知られ

たる「一佛成道觀見法界」の前二句に伴ふ後の二句なり。これ佛陀の正覺を成就し其知見を以て、法界の萬有を觀察するときは、非情の草木、國土に至るまでも、また能く成佛せざるなく、有情、非情皆本有の佛性眞如を全顯し來りて、涅槃光明の佛界を現ぜざることなしとの意なり。蓋し法界は一眞如の顯現なればその體平等にして、差別なきを以てかくいふ。法の潤ひ — 西方要訣に、「仰惟釋迦啓運、弘益有緣、教聞隨方、並需法潤」とあり。

曼荼羅 — 淨土の有様を圖に織り出だせるもの。即ち書畫共に表載したるものをいふ。

廢帝天皇 — 天平寶字八年廢せられて淡海公となされ給ひし故に、淡路廢帝と云へり。御謚淳仁天皇。

横佩の右大臣 — 帝王編年記に、「天平神護元年十一月二十七日、右大臣從一位藤原朝臣豐成薨す。春秋六十二。淡海公の嫡孫。政智廢の一男なり。後人難波の大臣と號し、又横佩の大臣と稱す。此大臣の女を中將姫と號す。當麻の曼荼羅を織りし時の願主なり」とあり。

稱讚淨土經 — 支那三藏譯、羅什三藏譯の阿彌陀經と同經異譯なり。

座禪圓月 — 雲玉集に、「中將姫二上山に草庵し給ひ、正身の彌陀來迎なくば畢命を期とせんとて念佛三昧に入り、窓々

たる窓の前に、月の光にさしあらはれて老尼一人來り給ふに、あやしみおほして、中將姫、「南無あみだ佛をのぞみ呼子鳥あやしや誰ぞ二上の山」尼かへし、「二上の雲路はるかに呼ぶ聲をしるべに分けし山窓の月」とあるをいふ。

我は誰をか呼子鳥 — 古今集第一卷、春歌上に載す、讀人不知の歌、「をちこちのたづきも知らぬ山中におほつかなくも呼子鳥かな」とあり。歌意は、何處といふ取付き所さへも分らぬ山の中なのに、ほつとした聲で何處ともなしに、人を來いと呼び立つる呼子鳥であるよといふ意。

時正の時節 — 晝夜の時間等しき彼岸の中日をいふ。

盡虚空界の — 往生要集に、「盡虚空界之莊嚴眼迷雲路、轉妙法輪之音聲聽滿寶刹」とあり。是は彌陀の淨土の莊嚴を讚せる文なり。即ち極樂世界廣大無邊なるをいふ。

爲一切世間云々 — 阿彌陀經に、「爲一切世間說此難信之法。是爲甚難」とあり。此文意は、念佛の法を指して難信の法といふ。初心の愚夫其心未練なるが故に、此一法を行するも、猶苦ありと思ふ故に難信といふなり。

慈悲加結令心不亂 — 稱讚淨土經にある文。阿彌陀如來が、その信する衆生に慈悲を垂れ、これを祐助加護して、散亂の雜心を起さざらしめ給ふをいふ。

十聲も一聲ぞ — 往生禮讚に、「名號を稱ふること下は十聲

一聲等に至りても定めて往生を得る」とあり。

さをなぐるま — 吳竹集、古歌に、「何事も思ひすてたる身ぞやすきさをなぐるまの夢の世なれば」とあるをいふ。匠材集に、さをなぐるまとは機織ひの事なりとあり。細川玄旨聞書に、はたを織る梭をばさと云ふなり。さをなぐる間といふは、其梭をかなたこなたに取わたすまのなき光陰の短きに譬ふるなり。萬葉集十三卷長歌に、「投左乃遠離居而」と詠めりとあり。

問狂言

門前の者出で、ワキと問答し、當麻寺及び曼荼羅の由來を語る。

これは當麻の門前に住む者にて候。今日は徒然なる折からなれば。當寺へ參り心を慰めばやと存する。いやこれなるお僧はいづくより御參りなされたるぞ(此間せりふ常の如し)先當寺に於て曼荼羅を織り給ひたる子細は。人皇四十七代の帝廢帝天皇の御宇に。横佩の豊成公の御息女に中將姫と申す御方。幼少の時より後生一大事と思し召すを。未だ御事にも足らざる人の。あの如くなる御心中は奇特なりとの御沙汰にて候。一度は山深き方に御身を隠されしが。後にこの寺へ御出であり御髪をおろされ。御名をば法如とやらん申して。大誓願を起し給ふ様。正身の彌陀如來を拜の奉らすは。この草庵を出づるまじきとあり。明暮念佛を御申しある處に。或時彌

陀老尼と現じ來り給ふを尋ね給へば。おことの呼び給ふによりこれまで來る由御申しあり。蓮の莖を數多集め給へ。極樂の様體を曼荼羅に織りつけ拜ませ御申しあるべきとの御事により。百駄の蓮の莖を集め置き給へば。かの尼來り自ら糸を取り。あれなる池にてすゝぎ給へば。五色となるをこれなる木に干し置き給ふにより。池をば染殿の井と名付け。これなる櫻をも染櫻とは申し習はす。それよりこの花五色に咲きたるなど申す。その後觀音と彌陀來迎なされ。この寺の乾の隅にして。西過ぎより寅の前方に。一丈五尺の曼荼羅を織りたて給ひ。極樂の様體上品上生申品中生下品下生の九品の體を。明らかに現し給ひたると承る。折節本末同じ如くなる竹が涌出して。かの曼荼羅の軸になりたると申す。然ればこの竹一夜に生じたるにより。一夜竹とは申し習はす。又節の間唯ひとよなるによつて一節竹とも申すに候。その後かの老尼はあの二上山をさして上り給ひし故。それよりも尼上が獄とは申し傳はる。まづ我等の存じたるはかくの如くにて候。(ワキ)これは奇特なる事仰せらるゝ物かな。さてはお僧の御心中貴きにより。古の化尼化女の假に見みえ給ひたると存する間。暫くこれに御逗留あり。重ねて奇特を御覽あれかしと存する。

白蓮ノ
天冠



天冠に白蓮を頂きて、
本曲、拵、観寺の
後シテ及び
羽衣、海士に
小書あるとき
等着す

黒垂
髪に似て
形異り、



同型に
白毛にて
作れるを
白垂と稱す
(資盛参考)

| 作 物 | 装束附(當麻) | | | | |
|--------|-------------------------------|----------------------------------|-----------------------------|---------------------------------|--|
| | ワ キ 備 | ワ キ ツ レ | ツ レ 化 女 | 前 シ テ 化 尼 | 後 シ テ 中 將 姫 |
| 杖 | 角帽子 着附小格子 白大口 水衣 緞子腰帶 數珠 扇 | 角帽子 着附無地鬘斗目 白大口 縷水衣 緞子腰帶 數珠 扇 | 面、連面 鬘 鬘帶 襟赤 着附摺箔 紅入唐織着流 | 面、姥 姥鬘 花帽子 襟白二 着附箔 無紅唐織着流 數珠 | 面、増 天冠 白蓮威 鬘 鬘帶 黒垂 襟白二 着附摺箔 緋大口 舞衣 胸箔腰帶 鬘扇 經 |



ワキ僧上
ワキ天
次身
ヨワク
拍子三合



當麻

素盞座席順
ワシ
ヤテレ

佛の行者にてん。われこの度三態野
に参り。下向道に赴きてひ。又これ
より大和路にかり。當麻の御寺に
参らばやと思ひひ。程もなく。歸り



紀の路の開越えて。歸り紀の路の
 開越えて。こや三熊野の岩田川。波も
 教るなり。朝日影。夜晝わかぬ心地し
 て。雲もそなたに遠かりし。二上山の
 麓なる。當麻の寺に着きにけり。當
 麻の寺に着きにけり。一声「一念彌陀佛」
 即滅無量罪とも説かれたり。八萬



諸聖教は。是阿彌陀ともあけに
 釋迦は遣り。彌陀は道守く一筋に。
 心ゆるすな。南無阿彌陀佛と稱ふ
 れば。佛もわれもなかりけり。南無
 阿彌陀佛の聲ばかり。涼しき
 道は。頼もしくや。濁りにしまぬ
 蓮の糸。濁りにしまぬ蓮の糸の五色

醫録

下

にいかに染みぬらん 拍子三拍子 ありがたや諸
 佛の誓ひ様ぞなれども 田カニスアリ わきて起せ
 の悲願とて迷ひの中にも 拍子三拍子 殊になほ
 五つの雲は暗れやらぬ 拍子三拍子 雨夜の月の
 影をだに知らぬ心の行方 拍子三拍子 をや西へと
 ばかり頼むらん 拍子三拍子 げにや頼めば 拍子三拍子 近き
 道を 拍子三拍子 なに遠ざと 拍子三拍子 思ふらん 拍子三拍子 末の世に

○小謡

迷ふ我等がためなれや 上歌 説き残す
 声法はこれぞ 元切 一聲の 元切 声法はこれぞ
 一聲の彌陀の教へを頼まず 元切 は末
 の法 元切 萬年を 元切 経る 元切 ま 元切 だに 元切 餘 元切 經 元切 の
 法は 元切 よも 元切 あら 元切 じ 元切 た 元切 ま 元切 た 元切 ま 元切 こ 元切 の 元切 生
 に 元切 浮 元切 か 元切 ま 元切 ず 元切 は 元切 又 元切 い 元切 つ 元切 の 元切 世 元切 を 元切 松 元切 の 元切 戸
 の 元切 明 元切 ら 元切 れ 元切 ば 元切 出 元切 て 元切 暮 元切 る 元切 ま 元切 だ 元切 法 元切 の



いかにこれをもとに
あつて申す事のか

場カマに交マシるなりカ。申カ法ホウの場カマに交マシる
なりカ。いかにこれなる方カタ々に尋タね

申カすべキき事コトのいハ何ナニ事コトにていハぞ

ワキ 閑カニスラリ
これは當タマ麻マの御ミ寺テにていハか
申カさん

バ當タマ麻マの御ミ寺テとも申カし。又マタ當タマ麻マ

寺ジとも申カしハいハ又マタこれなる池イケは

蓮ハスの糸イトを濯ススぎテ清スめしその故ユ



ふこれりも池は蓮の糸



に。深フカ殿テンの井イとも申カすとかや

申カて
あれは當タマ麻マ寺ジ。これコノは深フカ寺テ。又マタ

この池イケは深フカ殿テンのシ色イロ々々様サマ々々所トコロ々々

の。法ホウのミ見ミ佛ブツ圖ゾウ法ホウありとも。それ

をシもシいイさサやヤ白シロ糸イトのノたタがガ一ヒト筋スジぞゾ一ヒト心ココロ

不フ乱ランに南ナン無ム阿ア彌ミ陀タ佛ブツ。げケにあり

がたガまマきキ人ヒトの言コト葉ハ。即ソレちチこれコノをシ彌ミ陀タ

一教なれ。さて又これなる花櫻常
 の色には變りつ。されも故ある
 寶樹と見えたり。げによく観
 ト分けられたり。あれこそ蓮の糸
 を染めて。掛けて乾されし桜木
 の。花も心のある故に。蓮の色に咲
 くともいへり。なかなかなるべし

○小謡



雪の絶え向に晴れ曇る

もとよりも。草木國土成佛の色香
 に染める花心の。法の潤ひ種添へ
 て。濁りけまぬ蓮の糸を。濯ぎ
 て清めし人の心の。迷ひを乾すは
 緋櫻の色はえて。掛けし蓮の糸
 櫻。掛けし蓮の糸。櫻。花の錦の經
 緯に。雲の絶え向に。晴れ曇る雲も



あはれ秋の風ならん
 緑も紅もたゞ一聲の誘はんや西吹
 く秋の風ならん西吹く秋の風なら

ん。猶々當麻の曼茶羅の謂れ委
早詞 確カリ

しく御物語りゆへ
キ舞 拍子合

當麻の曼茶羅と申すは人皇四十
ス 二 ア マ

七代の帝。廢帝天皇の御宇かよ
ニ ア マ ミ カ ド ハ イ タ イ

横佩の右大臣豐成と申し人。○その
ヨ コ ハ ゴ 右大臣 豊成

○甘曲獨吟



タリ地

御息女中将姫。この山に籠り給ひ
 稱讚浄土經。毎日讀誦し給ひ
 しが。心中に誓ひ給ふやう。願はくは
 生身の彌陀來迎あつてわれに拜ま
 れおはしませと。一心不乱に觀念し
 給ふ。然らずは畢命を期として
 この草庵を出でと誓つて一向に

念佛三昧の定に今給ふ所は山
陰の松吹く風も涼しくしてさながら
夏を忘れ氷の音も絶え絶えに
心耳を澄ます夜もすがら稱々々
觀念の床の上坐禪圓月の窓の内
寥々々ある折節に一人の老尼の忽
然と来り行ありこれは如何なる人

やらんと尋ねさせ給ひに老尼答へて
宣はく誰とかなどやおろかなり呼
ばこそ来りたれと仰せられける程
に中將姫はあきれつゝわれは誰を
か呼子鳥 たづきも知らぬ山中に聲
立つる事としては南無阿彌陀佛の
稱へならで又他事もなきものをと

答へさせ給ひしに。それをそわが名な
 れ聲をうるべに來れりと。宣へば
 姫君もさてはこの願成就して生
 身の彌陀如來シげに來迎の時節金
 よと感涙肝に銘じつ。綺羅衣の
 御袖もヨをるばかりに見え給ふ。
 げにや貴き物語。即ち彌陀の教へぞ

と。思オにつけてありがたや。今宵
 二月中の五日にて。かも時正
 の時節金なり。法事をなさんため今
 この寺に來りたり。法事のため
 來るとは。そもや如何なる御事ぞ
 今は何をか色むべき。その古の化危化
 女の夢中に現れ來れりと。いひも

信濃

十七

和しや人ら
明して時よみの



二上の嶽は二上の



老の坂をよるよる



あへねば一光さして花降り異香
 薫る音楽の聲すなり秘かし
 や旅人よ暇申して帰る山の二上の
 嶽とは二上の山とこそ人はいへど
 真はこの尾がよりし山なる故に
 尾上の嶽とは申すなり老の坂を
 より上る雲に乗りてよりけり

紫雲に乗りてよりけり 中入間

口手詞 関カニ

かくありがたき御事なれば重ねて

奇特を拜まんと いひもあへねば

不思議やな いひもあへねば不思議

やな 妙音聞え光さし 歌舞の苦

薩の眼のあたり 現れ給ふ 不思議

議さよ現れ給ふ 不思議さよ

○切違難子

上白

乙



後三女上

出端

唯今夢中に現れたるは。中將姫の
 精魂なり。われ娑婆にありし時。
 稱讚淨土經。朝々時々。に急らず。
 信心誠なりし故に。微妙安樂の
 結界の衆となり。本覺眞如の圓
 月に坐せり。然れども。を去る事
 遠からずして。法身却來の法味

となせり。ありがたや。盡虚空界の
 莊嚴は。眼は雲路にかやき
 轉妙法輪の音聲は。聽寶刹の耳
 に充てり。蕭然とある曉の心
 誠に涼しき。道に引かる。光陰の
 ころろ惜しむべし。やな惜しむべし。や
 な。時は人を待たざるもの。を即ち

110 小

下



戴きまつれや

戴きまつれや。唯心の淨土經。戴きまつれや。
 戴きまつれや。攝取不捨。為一切。
 世間説此難信。之法。是為甚難。
 信ずる。信ずる。
 げにもこの法甚しければ。信ずる。
 事も難かるべしとや。た頼め。頼。
 めや頼め。慈悲加祐。令心不乱。
 乱るなよ。乱るなよ。十聲も。



後夜鐘の

○独吟
○仕舞

一聲ぞ。ありがたや。早舞。寺上寺返。
 後夜の鐘の音。後夜の鐘の音。
 鳥鐘の響。稱名の妙音の。見佛。
 聞法の色々の法事。げにもあまね。
 き光明遍照十方の衆生を。た西方。
 に迎へ行く。法法の船の。水削掉。法。
 法の船の。さを投ぐるまの。夢の夜。



た。あ。あ。あ。あ。

100

100

一、元一、千、一、ナ、半、ニ、タ、ニ、元、ラ
はほのぼのとぞなりける。

一、元、一、千、一、ナ、半、ニ、タ、ニ、元、ラ

一、元、一、千、一、ナ、半、ニ、タ、ニ、元、ラ

昭和七年七月十日納本
昭和七年七月十五日發行

橋本真吉



昭和版

訂著作者

廿四世 觀世左近

發行兼
印刷者

檜常之助

發行所

檜書店

京都店

京都市二條通越屋町東北角
振替大坂三六八番、電話上二九〇番

東京市神田區錦町一丁目十番地
振替東京三五五番、電話神田二五二番

終